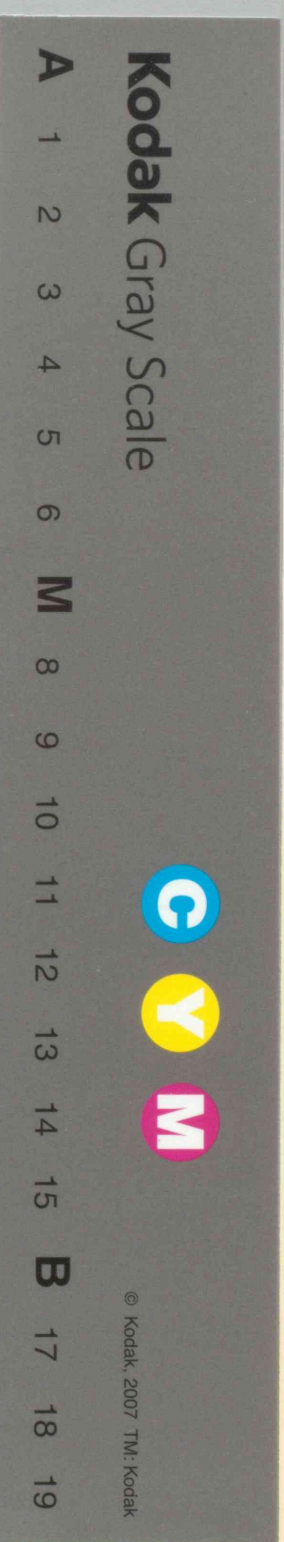
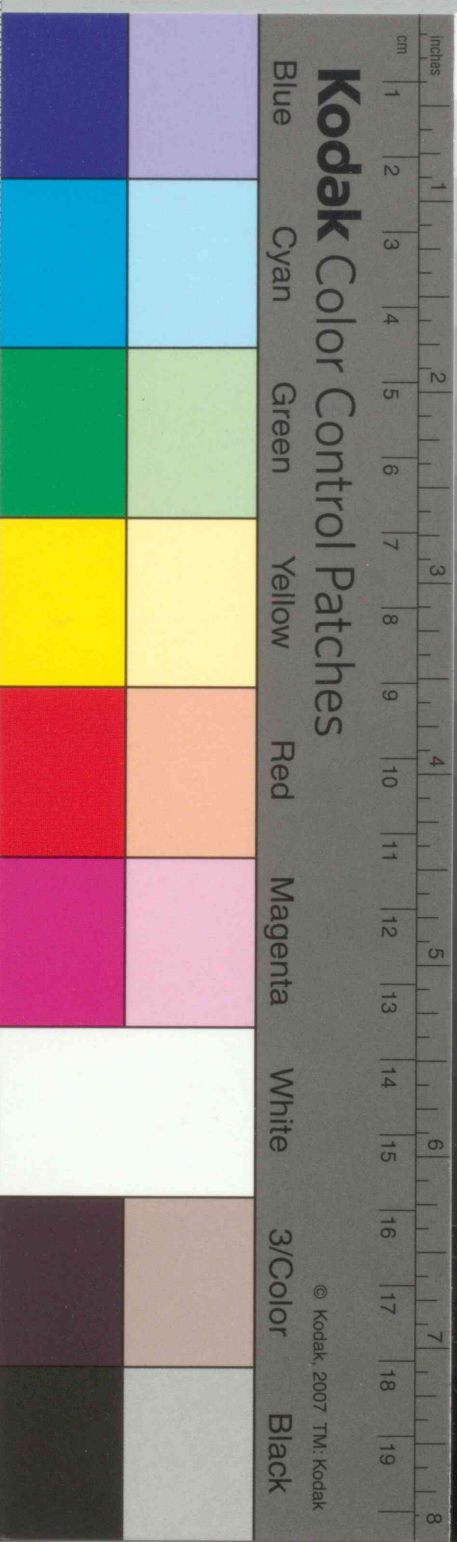
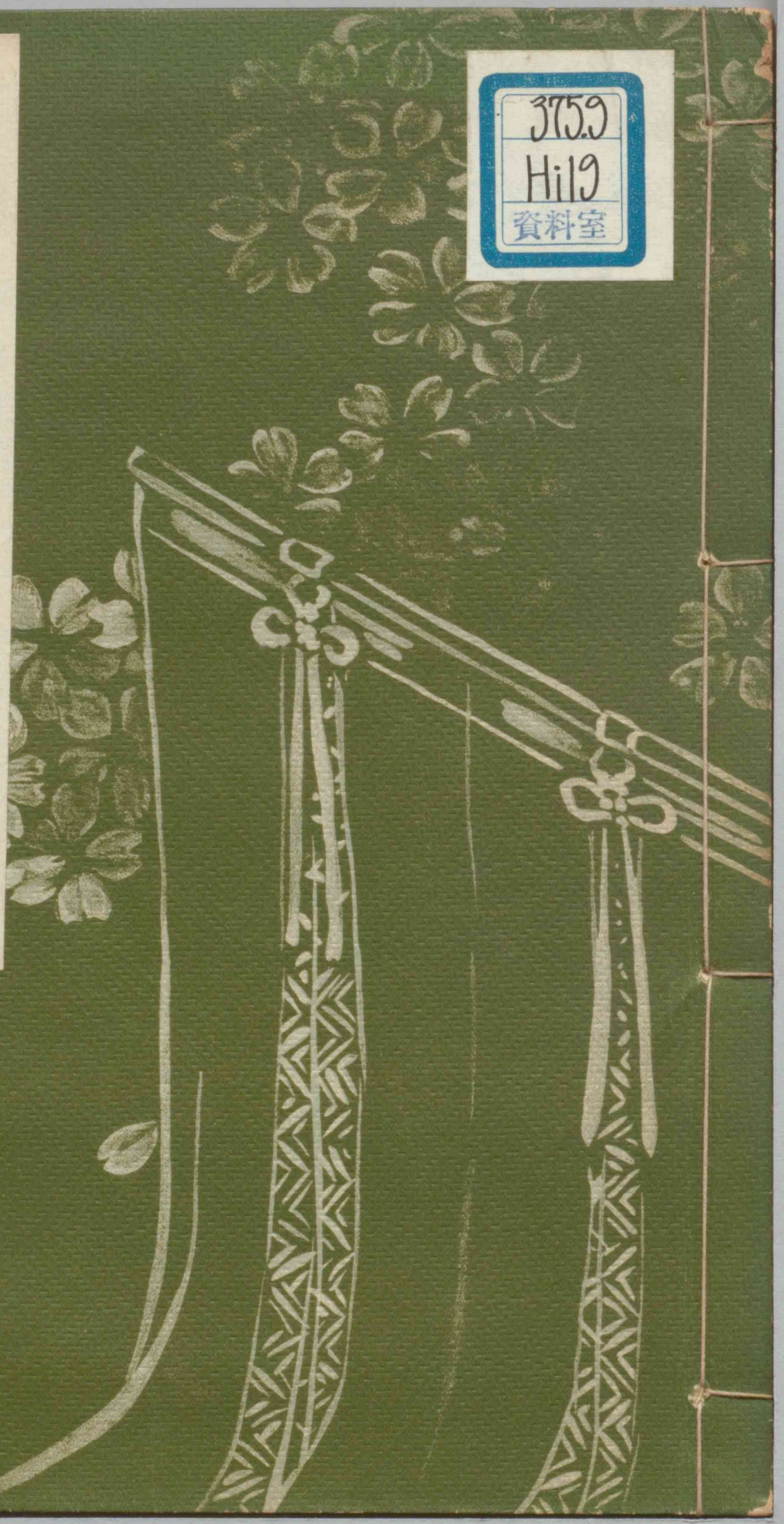


女子新讀本 卷四

3759  
Hi19  
資料室



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42225  
教科書文庫  
4  
810  
42-1926  
200030  
1726



資料室

3959

H119

文部省檢定済

大正十五年十月二十一日 高等女學校國語教科書

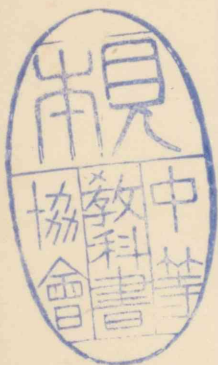
東京帝國大學教授久松潜一編



# 新讀本



東京 至文堂



## 女子新讀本 卷四

### 目次

一	月雪花……………	芳賀矢一…一
二	繪の旅から……………	矢崎千代二…九
三	雀(一)……………	北原白秋…七
四	雀(二)……………	北原白秋…二〇
五	眞珠貝(韻文)……………	與謝野晶子…二四
六	碓氷峠……………	荻原井泉水…二七
七	月下西湖……………	谷崎潤一郎…三三

目次

八 人口登録……………佐々木指月…四

九 庭……………川路柳虹…五

一〇 明治神宮(一)……………明治神宮記ニ據ル…五

二 明治神宮(二)……………明治神宮記ニ依ル…三

三 照憲皇太后十二徳の御歌……………六

三 小兒の世界……………西條八十…七

四 子供と其父……………武者小路實篤…七

五 融合ふ心……………相馬御風…七

六 他人の長所短所……………阿部次郎…九

七 手品師……………薄田泣菫…九

八 南國の町と島(一)……………吉田絃二郎…九

九 南國の町と島(二)……………吉田絃二郎…一〇

一〇 民族競争と科學(一)……………岳淺次郎…一〇

三 民族競争と科學(二)……………岳淺次郎…一三

三 牧場の暁……………杉村楚人冠…一三

三 思出の記(一)……………高山樗牛…一五

四 思出の記(二)……………高山樗牛…一三

五 卵……………石原純…一六

六 沼地……………芥川龍之介…一四

七 板倉勝重……………藩翰譜…一七

六 汽車……………北原白秋…一五

元 鍛鍊……………河上肇…一五

三 法隆寺の鐘……………高濱虚子…二六

三 瀬戸内海……………志賀直哉…二六

三 大きな戸……………佐藤春夫…二五

目次終



女子新讀本 卷四

文學士 久松潜一編

一月雪花

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休  
息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈では  
ない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は  
ながめて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を  
伏して、大小の有象無象悉く照破される光景を現するが、月

一月雪花

一

輪は萬象を一つに包んで貴賤・貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清涼の光である、皎潔無垢、崇美と稱ふべきやさしい



熱地帯の家屋

光である。休息。安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じる。詩

\*荷田蒼生子(徳川時代の女歌人)の詠

國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心は違ふのであらうが、隈なく世界を照らす月光の人間の胸懷に沁み渡ることとは、恰もその影の干草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけり」である。

東西古今、喜悲苦悶の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し、之を吟詠した詩歌は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者は曰ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊であると。この冷たい光が古往今來、どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純

潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。

高樓も茅屋も皆同じ色に埋める。げにや花ならば咲かぬ梢

もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山」といふやうに、眼に入

るもの、凡てその下に包まれてしまふ。三千世界銀成色、十二

樓臺玉作層の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱



寒地に於ける氷の家

\*僧仙覺の詠  
(新續古今集)

\*唐の詩人白樂天が  
詩中の句

\*月中にあるといは  
れた宮殿

かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、また、く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるものである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感は少しも變らぬ。花紅葉色々のながめはもとより美に相違ない。花の散つた後の新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を悉したものではないか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程楽しい

ものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花はその美しい色の外に、香はしい匂さへ有つて居る。我等の食用のために作つた菜や大根などの花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、どれ程の寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室

の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これはむしろ花を貴んで、その濫用をつつしんだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する、人は死んでも花を離れぬのである。月雪のながめはその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗・華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々しい、華美・華麗・華奢等の語は皆花に本づいた語である。花に關する古今東西の詩歌を擧げるのは愚であらう。余は唯、花をし見れば物思もなし。といふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信ずる。月雪花三つのながめは各、その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

\*年ふれば齡は老い  
ぬしかはあれど花  
をし見ればもの思  
もなし  
藤原良房の詠  
(古今集・大鏡)

康資王の母の詠  
(古今集)

清原深養父の詠  
(古今集)

諸曲葛城中の句

山櫻花の下風吹きにけり、

木のもとごとの雪のむらぎえ。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、

雲のあなたは春にやあるらん。

これは雪を花にたとへたのである。

「笠は重し吳山の雪、鞋は香ばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。」

これは雪を月と花にとたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年

英國の北方洋上に  
在る大島

文學博士  
國文學者  
東京帝國大學長  
教授

中氷雪に鎖されてあるアイスランドでは氷は即ち人の家である。この地方には寸紅の目を樂しませるものも無い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ地方もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は瓊玉を綴る雪の奇觀は見た事がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して夜更を知らぬ繁華の倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人は昔も今もこの三つの眺を恣にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

(芳賀矢二)

## 二 繪の旅から



(一) 啞で聾

言葉がわからねば啞で聾である。定めし不自由だらうと同情されるが、慣れるといふ事はえらいもので、例へば手が一本不足したとすれば、始めは不自由だらうが、それを補ふ爲に他の部分が發育して、思つた程困らなくなる。言葉がわからなければ感じがよくなつて、割合に間違が少いと共に、悪口が聞えないから氣樂である。

どこの言葉でもできるに越した事はないが、印度に三年支那に二年、南洋に半歳、今は巴里にゐるが、これから先どこへ往くともわからぬ身で、骨折つて一國の言葉を覚えても又すぐ不用になるとあきらめて、相變らず啞で通して居る。

勿論困ることは度々あるが、随分をかしい事もある。

獨逸の山の中などで、生れて異人種を見たことのない田舎人の、何か口をきいて見たさに考へ出す事は、大抵何時だかね。と時刻をきく事であるから、いつも無言に時計を見せるが、時には他の事をきかれて時計を見せて笑はれる事もある。

此の前ドレスデンで、珍しさうについて来る四五人の子供が、今度は先に立つて案内するから、どこへつれて行くかと物ずきにもつれて行くまゝについて行くと、御親切に中央停車場の通譯の詰所へ引張り込んだ。そこで世界中央の言葉が通じると言ふのだが、生憎日本語は通じない。

都會の電車路などの人通りの多い場所で、寫生して居ると、巡查が來て文句を言ふ。相手にならず居ると、中には耳が遠いと思つて、耳のそばに口をよせて一つ事をくり返しくり返し言つて居る。こゝで寫生してはいけないといふのだらうとわかつて居ても、言語不通を幸に、ごてごてやつてゐるうちに、畫の方は出來上つてしまふ。これは不通の一得である。

(二) 見物人の親切

ロンドン税關裏の河岸で、十二號大のトアール<sup>\*</sup>を畫架に立てて畫いて居ると、さつと吹いて來た風に畫架もろ共描きかけのトアールは河の中へ吹き飛ばされ、折柄の引潮に

\*畫布

一シル  
\*我が國の約四十  
八錢に當る

乗つて流れて行く。見て居た人たちは洋傘やステツキを揮つて追つかけてくれるが短くて届かない。その中に向ふ河岸の小舟を呼んでくれると、船頭さんが早速漕ぎつけて岸へ揚げてくれた。いくらかやらうとすると、それに及ばないといつて漕ぎ出してしまふから、一シルの銀貨を舟の中に投込んでやつた。

サキノニ、スキスの山の中で谷川を見下して、やはり油で畫いてゐると、背負籠を背負つた通りかゝりの小娘が只一人始めから見て居た。その時、生憎解き油の揮發油の無くなつたのを見ると、小娘は黙つて油壺を取るから、何をするかと思つて見てゐると、はるか下の谷川まで行つて水を

一ぱい入れて歸つて來て、又黙つてパレットにさし込んで得意の微笑を洩らしたのである。揮發油を水と思つて居たのであつた。

エルベ河の日の暮であつた。向うに王宮を見て月見草の咲く川原の草の中でかいてゐると、四五人の少女が寄つて來て、「うちは遠いのか」ときくから、「遠いのだ」と答へる。すると淋しからうから踊つて見せてやる。といふ事で、盆踊を見るやうに揃つて歌ひ舞ふのである。四つか五つの小さい妹も手を揃へて踊る。

巴里郊外の雪の中で寫生して居ると、男の子供が傍の百姓家の板の扉をめり〜こはしにかゝるから驚いて見て

ゐると、その破片を積んで火をつけて、それで煖まれといふ親切であつた。

(三)

世間のいろ〜  
寫生の七つ道具を携帯して、ロンドンのシチーあたりの自動車の中を抜けるのは骨が折れる。時には巡查が片手に道具を持つて、片手でこちらの腕を抱へこんで渡してくる。巡查は大きいから吊りさげられて足が地につかない。はたから見たら日本人が悪い事をして捕へられて行く様であらう。道をきいても巡查が手をとつて連れて行く事があるが、さういふ時には人通りの少い處でにやりと笑つて手を出す事がある、出さない時もある。巡查でない

人に道をきくと、數町の遠方をわざ／＼送つてくれる事がある。さういふ紳士には禮のしやうがない。かいてゐる中に「それはいくらで賣るか」と訊くものは極めて多い。その態度もいろ／＼である。ひやかしもあり、本氣なものもある。アメリカの旅行者などは一種の挨拶位に思つて居るから、皆一樣に「賣らないのだ」と斷るが、中には「何故賣る事が出来ぬか」と議論をしかける者もある。さういふ者には無代で進呈したいと思ふ。汽車の中で肖像をかいてくれとせがまれる時には、スケッチブックに色鉛筆でかいてやるが、四五人の時は互に先を争つてる間に汽車はつく。御禮に名刺を出して「日曜に来てくれ」といふのが

\*洋畫家

例である。

\*矢崎千代二

### 三 雀 (一)

細かな春の小糠雨が、猫柳の銀色の毛に沁み付き、池の畔の古い柳が青い芽を吹く彼岸前後になると、百姓も蓑笠を着け、馬犁を押して、しつ／＼と馬を追ひながら、急に青みを増した水田の中をちやぶちやぶと犁いたり、水滴を跳ね散らしたりします。さういふ姿が彼方の田にも、此方の田にも、春の小雨に霞んで往つたり來たりしてゐる。それは奥床しいものです。蛙ももうころ／＼と咽喉を鳴らし始めてゐます。燕も幾百羽となく群がつて、水にすれすれに飛び翔つてゐます。さういふ時、雀も傍の枝垂柳や破れかけた枝折戸の上などで、巢立つたばかりの可愛い頭を並べて、物珍

三 雀 (一)

一七

しさうに羽翼を搔いたり、尻尾を振つたりしてゐます。時たま馬がしみじみとその下の萌出た野茨の垣根に近づいて、思はず太い嚏をすると、雀は驚いて轉げ落ちたり、飛び立つたりします。

春が過ぎて、野川の邊などに、白い野茨が咲き盛ると、雀の子も稍大きくなつて、眞白の胸の胴衣をこれ見よがしに翼を開いては、眞直に上向きに飛ばたいたり、飛びつきかけては飛び立つたり、縋りついたり、尻尾を逆様にひつくり返つたりします。それをまた無邪氣な悪戯好きの小犬が追つかけてたり、逃げたり、それは賑やかな初夏の涼しさとなります。

さうなると百姓達も、男も女も總出で、新しい菅笠の田植姿となつて、水田の中に白い鶺鴒の鳥のやうに並んで蹲むと、雀も亦緑色の

畦路などへ来て蹲んだり、雨でも降る日には、蓑笠姿の鰻でも擔ぎさうな姿で歩いたり、水田にばちやばちやと羽搏いたりします。

日が暮れかけて、細かな雨が次第に上つて来て、匂はしい紅みがさしかけたと思ふと、青い早稻田の中空には、思ひ掛けない七色の虹の弧が、裾の方まで鮮かに架け渡す、素晴らしい景色に出逢ふ事もあります。圓い菅笠の幾つかも一齊にそれを見上げます。木木に歸りかけた雀の喜も一通ではありません。

葛飾の私の紫煙草舎でも、偶、さういふ風景の下に光り耀くやうになつた事がありました。廂から落つる雨の雫も、七色に染まつて燦々してゐました。そのまた雨垂に雀が驚いて羽搏きしながら、縋り附いたり、飛沫を散らしたりするのです。その雀も光り耀くばかりに見えましたが、それを眺めてゐる私達も思はず恍惚と

した靈感に打たれて、身體も心も光るばかりに覺えました。

#### 四 雀(二)

庭の澁柿が赤く色づく頃から、私の草舎はまるで雀のお宿見たいになつてしまひました。葛飾田圃の雀はその赤い澁柿ばかりを目がけて、四方から群がつて来るやうでした。さうして、澁柿が愈腐れて落つれば落つるほど、集まつて来る雀の数は愈多くなるばかりでした。寒さも愈寒くなりました。後にはその枝にたつた一つしか赤い實は残つてゐません。さうなると今度は雀が鈴なりになつてしまひました。人家の傍の田を作るものでは無いといふ話です。見渡す限りの稲の穂波が愈黄金色に色づいて、晩秋の風にさわ／＼と揺れ立

つ頃になると所謂千羽雀の時節になります。その雀の数の多い事は、全く千羽雀といつても千羽位の數ではありません。何千何萬とも知れぬ雀の群集が、彼方にも此方にも、黒胡麻のやうに亂れ落ちたり、飛び上つたり、遙の空から稲の穂波とすれ／＼に、金色に競つて光つて、羽搏き羽搏き、なだれて来るかと思ふと思ひ掛けな、い近くの田圃から、また入れ代りに擾れ立つて逃げたり、または專念に向ひ風に羽搏く雀、激しく吹き分けられて二羽三羽と方々へ外れて、向き／＼に頭を縮めて羽搏く雀、たつた一羽になつて翼を細かにちぎれるほど振りきつて、何處へ行くとも知れず、小さく飛んで行く雀、さういふのが唯の一羽でも鳴き立てぬ雀は無いのだから、その騒がしさ、喧しさといふものはないのです。取分けて赤い赤い太陽が、本所邊の濛濛と煙つてゐる幾百とも知れぬ大煙突

の向うに落ちかゝつて、西方一面に赫々と赤く反照する日の暮れ時の群雀の姦まじさは、全く耳が金響になるばかりでした。百姓達はたまらなくなつて、田圃へ出てほうくと追つてはるますが、その聲の淋しい事といつたらありません。追はれる雀は利口です。自分達の下りてゐる田から一番近い家の庭の樹立を目がけて逃げて來るのです。ほうくと羽音を立てて、まるで驟雨の襲うて來る惶急しさで、一時に逃げて來ます。そして樹の上で、一しきり鳴き騒ぎながら、一つには様子を仔細に觀、二つには疲れを休めて、新しい元氣を附けると、また向うへ行つた百姓の後から、元の田へ一齊に飛び下りる、また追はれて逃げて來るといふ風です。それが朝から晩までだからたまりません。逃場所のある家の近くの田圃などは一番に荒らされてしまふわけです。

此の時節こそ雀の一年中の收穫時であつて、雀は全く欣喜雀躍です。少々遠くの都會からでも、この頃は晝は總出で出稼に來ます。葛飾で無くとも、田圃のある限り、雀はそこらの電線や木の上に鈴なりです。

赤い夕焼の空に火の見梯子が遠見に染まり、近くの電線に雀が尻上りや肱立ちをやつたり、まるで機械體操か輕業見たいな身振り、前後も知らずに踊り返つてゐます。

愈、寒い冬の日が近づくと、道端に架け渡した掛稻の上に何羽となく雀が日向ぼつこを始めます。

村社の壞れかけた石の鳥居や、色の褪せた赤い鳥居にも、稻束が掛け連ねてあると、その上には雀が行儀よく一列に並んで、刈り盡

くして曠々となつた田圃續きを眺めたり、落穂拾ひの寒々しげな姿を見下したり、遙に天の一方に眞白くなつた富士の山の神神しさを仰いだりしてゐます。

ともすると、非常によく晴れた日などは、稍小高みの丘の祠の干木の頂邊に、一羽の雀がちよんととまつて日和見をしてゐる、澄み切つた姿さへ見受けます。さうして幾日か寒々しい日が續くと、愈々曇まじりの粉雪が降つて來ます。さうして百姓もちぢかめば雀もちぢかんで、何時の間にかやら自然とお爺さんくさくなつてしまふのです。

(北原白秋)

\*名は隆吉  
詩人

### 五 眞珠貝

眞珠の貝は常に泣く。

人こそ知らね大海は  
風吹かぬ日も浪立てば、  
浪に揺られて貝の身の  
處さだめず伏し轉び、  
千尋の底に常に泣く。  
まして偶目に見えぬ  
小さき砂の貝に入り、  
浪に揺らるゝ度毎に、  
敏く優しき身を刺せば、  
避くる由なき苦しさに、



貝は悶えて常に泣く。  
 忍びて泣けど、折々に  
 涙は身より滲み出て、  
 貝に籠れる一點の  
 小さき砂をうるほせば、  
 清く切なきその涙  
 はかなき砂を掩ひつゝ、  
 日毎に珠と變れども、  
 貝は轉びて常に泣く。

\*歌人  
評論家

東に上る「あけぼの」は  
 その温き薔薇色を、  
 夜ゆく月は水色を、  
 虹は不思議の光彩を、  
 共に空より投げかけて、  
 珠は眞珠と成り行けど、  
 それとも知らず、貝の身は  
 浪に揺られて常に泣く。

(與謝野晶子)

### 六 碓氷峠

峠の登り一里は頂まで續いて路がよく、私ひとり草鞋を

穿いて來たのが、仰々しく感じられる位であつた。三人は散歩をしてゐるやうな軽い心で話しながら歩くうちに、人家が十軒ばかり並んだ所へ出た。そこがもう峠の頂上であつた。或家は屋根と道とすれ／＼位に低く建ててある。或家は崖にびつたりと寄せて建ててある。何れも近い中に襲うて來る激しい寒さと雪風とを避けるために、身構へしてゐるやうな家構が淋しく見られる。畑とも庭ともつかぬ處に作つてある赤い菊なども大方枯れてゐる。黒い塀を袖とした黒い門に注連繩を張つてあるのは御師の家であらう。其の先に石の玉垣をめぐらして、高く石段を造つた宮居が此の峠の鎮守たる熊野神社であつた。日本武

尊が、こゝから關東の野を眺めて、弟橘媛を追慕せられたといふ舊蹟として傳はつてゐる。まことに質素な小さい祠は、強い風や雨にさびきつて、日黒んだ板の色や羽目の破れなどが却つて尊く勿體ないやうにさへ思はれる。

熊野神社の前に「是より二丁見晴亭」と書いた案内札が立つてゐる。その細い道の雑木が枯れながら袖に觸れる中を、三人は一列になつて歩いた。後ろを振り返ると、今休んで來た茶屋の軒に立つてゐる旗が風に動いてゐる。それには紺地に白く「碓氷貞光力餅」と染め抜いてあつた文字が思ひ出される。私達と並んで力餅を食べてゐたカンバスと繪具箱を持つた二十許の青年の顔が、一寸頭に浮んで消

える。空は益澄んで濃い青さになつた。此のやうな山國の空の色の濃さは深い海の水の色の濃さを思はせる。たつた一片の小さな白い雲が、宛も大洋の眞中に浮いてゐる。海月のやうにふわりと浮んでゐる。友が「かういふ雲です、私がこないだの會の句に、『空の青さしみじみ浮雲消ゆる。』と作つたのはかういふ雲です。御覽なさい今に消えてしまひますから。」といふが儘に、私達は眩しいやうな空をじつと見てゐた。なるほど其の雲はだん／＼薄くなつて、海月が日の光に融けてしまふやうに、空の中に吸ひ込まれてしまつた。そして其の雲が消えてしまつた後には、ふつくり盛りあがつたやうな大きな蒼さが、ただ燦然と輝いてゐる。

と、熊野神社の裏手の森から、ヒラ／＼と舞ひ出たものがある。鴉かと思つたが非常にすばやく空の中心を指して高く高く揚つた。暫しは太陽に近いので見る事が出来なかつたが、やがて遙か向うの空へ、強い風に揺られてもしてゐるやうに、身を振りつゝ流れて行つた。「鷹です、確かに鷹です。」と友は銃獵に慣れてゐる鋭い眼で見詰め乍らかういつた。此の一色に風いだ沖のやうな峠の空の廣さへ飄々として浮び出た猛鳥を見る事は、まことにかうした旅で味ひ得る壯心とも云ふべき感じである。「鷹一つ見つけてうれし伊良古崎(芭蕉)——全くさういふ感じである。此の句を前にしては私の句は恥づかしい氣がする。」

木々枯れつくし鷹はればれと澄む日なり  
 見晴しといふのは、山の一角が谿に突き出たやうな形に  
 一丁程の廣さの草原になつた所である。此處から眺望は  
 潤々と左右に開けてゐる。南の方は、熊の平邊から、妙義秩  
 父へかけての野州・武州の連山が幾重にも幾重にも脉をな  
 し、光と影とを疊みかけて重なつてゐる。古代の和歌に「た  
 たなはる青垣山」といふのは、斯ういふ連山に對した感じを  
 いつたのであらう。日本武尊が遙かに眼を放たれて「吾孀  
 はや」と叫ばれたといふ其の感慨も、此の昔ながらの山山を  
 目撃して始めて私達の心に強く響いて來る。北の方には  
 淺間が其の頂から裾まで少しも隠す事なき全き姿を押し

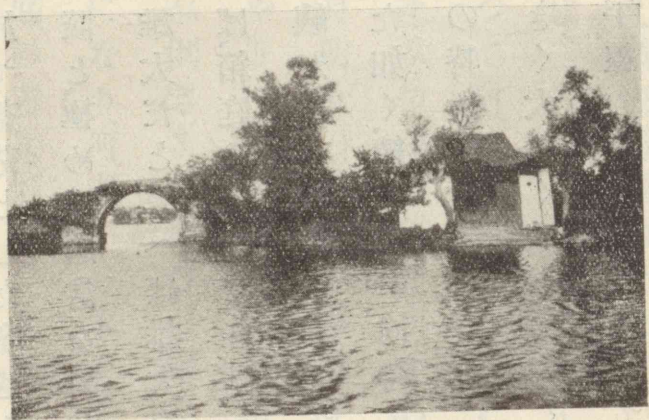
\*名は藤吉  
 文學士  
 言語學科出身  
 俳人

立ててゐる。今日は噴煙が極めて少く、僅かに雲かと思は  
 れる位に白いものが頂上に流れてゐるだけである。山の  
 肌は黄の勝つた茶褐色に枯れてゐるが、一面に陰もなく日  
 光を吸うてゐる爲か、潤ひのあるつやを含んで、動物の皮膚  
 に見られるやうな光澤が暖い感觸を思はせる。  
 まことに此の草原の見晴らしはよい。然し「見晴亭」とい  
 ふ茶屋がある譯でもなく、板割の卓に板割りの腰掛を置い  
 た小さなあづまやが淋しく設けられてあるだけであつた。  
 私達はそこで又句帖をひろげたりした。  
 (荻原井泉水)

七 月下の西湖

夕食を済ませた後ホテルの後の碼頭から畫舫に乗つて出たのは、其の晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて一點の雲もない大空の月の光を満身に浴びてゐた。いかに隈なく晴れ渡つた宵であつたかと言ふ事は、湖を取り巻いてゐる四方の山々や、汀に近く女の洗髮のやうに頂垂れて居る楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが、一つ一つ其の影を水面に落してゐたのでも、凡そ想像することが出来よう。

はつきりと映つてゐるのを眺めた覺えはあるけれど、今夜の月はあの時にもまして朗かである上に、湖の廣さも亦



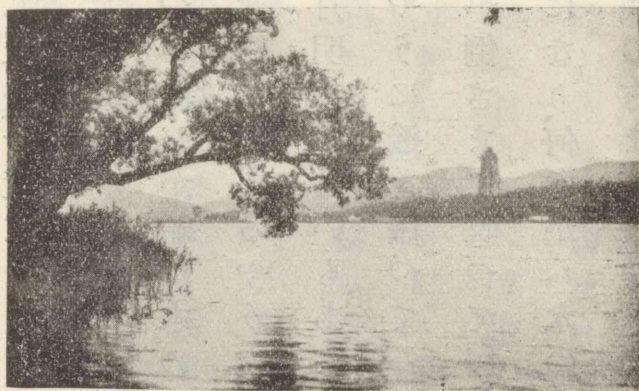
西湖蘇堤春晩

甘棠湖よりは遙かに大きい。水の面と言ふものは、それだけでなくも斯う言ふ晩には實際よりひろびろと見えるものだが、船がだん／＼陸を離れるにつれて、私の行く手に湛へられてゐる湖の水は、腹が膨らがるやうに底の方から盛り上つて来て、次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。ここでちよつと斷つて置きたいのは西湖の風景が美しいのは、主として其の湖水の面積が洞庭湖や鄱陽湖のや

うな馬鹿々々しい大きさをなく、一目で見渡される範圍に於て蒼茫とした廣さを持ち、優しい姿をした周圍の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つて居る點にあるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば、箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら一枚の繪を擴げた如く、總べてが同時に雙の眸に這入つて來るのが、此の湖の特徴である。今夜にしても船が進むに隨つて、無限に大きく大きく開いて行くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向うへは隠れてしまはない。が、その實岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるものや

うに感ぜられる。首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろ／＼と眼を下の方に向けると、私の視野に這入るものは、やがてただ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つて居るのではなく、水の底に沈みつつあるやうな心地がする。おまけに此の湖の水は、月明りのせいもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透き徹つてゐるので、鏡にも似た其の表面に船の影が倒さまに映つて居なかつたら、殆ど何處から空氣の世界になり、何處から水の世界になるのだか、區別がつかない程底の方まではつきりと見えて居るのである。吃水の淺い、草履の様に薄つぺらな船の上に横たはつて、水と空氣との

相觸れる平面を滑かに進んで行く私の體は、ただ濡れて居



西湖雷峰夕照

ないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したと言つてもいゝくらゐである。舷に顔を出して底を視極めると、深さは漸く二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」と云つたのは、思ふに此の湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美しさと、は、かうして此の底を眺める時に、始めて明らかに會得することが出来る。私は先づ深山の

靈泉のやうに透き徹つて居ると言つたけれども、ただそれだけでは、到底此の時の感じを言ひ現すには物足りない。なぜかと言ふのに、此處に湛へられて居る三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様なたとへばとろろのやうな重みのある滑かさと、飴のやうな粘りとを、持つてゐるからである。此の水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に曝して置いたなら、冷やかな月の光を受け留めて、水晶の如く凝り固まつてしまふであらう。私の船の艚は、そのねつとりとした重い水をすらしりと切つて進むのではなく、ぬら〜と捏ね返すやうにして操られて行くのである。折々艚が水面を離れると、水は青白く光りながら

一枚の羅衣らぎのやうに、それへべつたりと絡はり附く。水に纖維があると云つてはをかしいけれど、全く此の湖の水は蜘蛛の糸よりも更に微かな、さうして妙に執拗な弾力のある纖維から成り立つて居るやうにも感ぜられる。とにかくに綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そんな感じがするのは、一つには其の水底に蒼苔の様な細かい藻草が密生して居て、柔かい天鵞絨の床の如く暗綠色の光澤を反射して居るせいでもあらう。實際それは非常に精巧な、驚くべき美しいつやと潤ひとを持つた天鵞絨と云ふより外に適當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は其の天鵞絨の地質

を一層つやつやと光らせる爲に、無数の長い銀の糸で、蛇のうねりの如き波紋を一面に縫ひ取つて居るのである。こんな美しい織物が人間の世界にあつたなら……。若し此の湖に仙女が居るならば、彼の女の纏ふべきマントの色は必ず此の天鵞絨であるに違ひない。底が餘りに浅い爲に、どうかすると艚は心なくも其の天鵞絨の面を搔き亂す。ほつと砂埃が風に舞ひ上るやうに、濁つた泥が圓い輪を描いて煙の如く水中に浮かび上る。柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつて居る脊の低い一むらの林は恐らくは桑畑か何かであらう。右



岸はと見ると、——船が私の知らぬ間にぐるりと方向を一  
轉したので、何だか斯う、急に眼が廻るやうに周圍が濶然と  
打開け、寶石山の保數塔が波に没しかかつた帆柱のやうに、  
遙な空にぼうつと夢の如く淡く霞んで居る。その左の葛  
嶺の山の裾に、灯がちらくと瞬いて居るのは新口旅館だ  
らう。此處から眺め渡した様子では、向岸までは非常に遙  
で、西湖は海の如くひろがつて居る。しかし海にしては水  
面が穩か過ぎて、殆ど波らしいものは眼に留まらない。私  
の體が蟲けらのやうな小さなもので、偉大な大理石の圓盤  
の中に置かれて居るのかとも想像される。子供の時分に  
野原の眞中などで、眼を瞑つてぐるぐる廻つた後で、又ばつ

と眼を開くと、よくこんなひろびろとした、氣が遠くなるや  
うな天地の大いさを感じた記憶がある。だが、それよりも  
尙不思議なのは、そんなに廣々として居ながら、何處まで行  
つても水は依然として二三尺の——或はせいぜい人間の  
胸のあたりまで漬かるくらゐな深さしかない。西湖は湖  
ではなくて、恐ろしく大きな池であるかの如くに、その時し  
みじみと感ぜられたのであつた。巨人が箱庭を作るとし  
たら、きつと此の西湖のやうなものが出来るに違ひない。  
此の湖が此のやうに靜かなのは、さうして其の面にあらゆ  
る物象が鮮かな影を映して居るのは、畢竟水底が斯くの如  
く浅い爲に波らしい波が立たない結果なのであらう。 盥

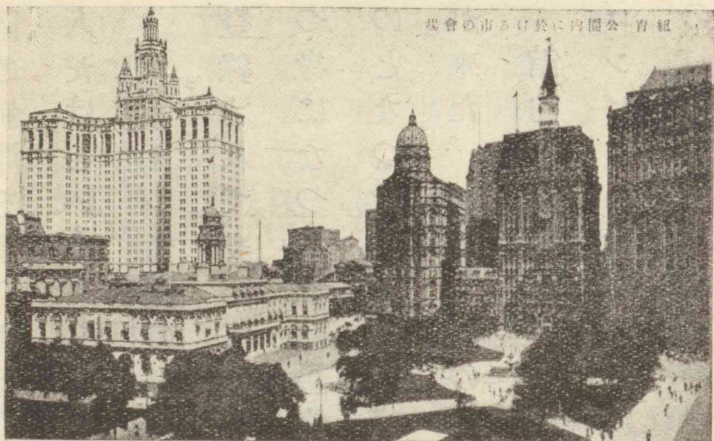
の中にも山の影が映るやうに、たとへ二三尺の深さでも水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く盛り上つてゐる孤山の翠嵐を始めとして、その左に低く長く、女性的な優雅な曲線を起伏させて居る天竺山・棲霞嶺・南高峰・北高峰の山が、月の光に融けてしまひさうに朦朧と消えかかりながらも、猶その影を一つ一つ倒さまに映して居る莊嚴な姿に接した時、どうして此の湖の水底の深さに考へ及ぶ餘裕があらう。

\* 作家

「おい、暫く此處で船を停めてくれ。」

\* (谷崎潤一郎)

### 八 人口登録



紐育市の景

一千九百十八年九月、世界大戦争の眞最中、私は北米合衆國の人口登録を紐育で受けた。私は紐育のユニオン角園の登録所へ行つた。當時米國は第三二國民軍の動員を了へて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街道は星條旗の虹を靡かして行進する軍隊の喇叭の音が高い建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年といへば悉く軍

隊の制服を纏ひ、纏はないものは老人と婦人と子供と外國人だけといふほどであつた。

ユニオン角園の登録所で、私の名が合衆國の帳簿の上に登録されて、やがて送附さるべき地方兵事課の召集狀を待つ身になつて、私は星條旗に對して熱心に敬意を表するものとなつた。一週間ばかり立つと、地方兵事課から呼出狀が來た。出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗が掲げられ、自由の女神コロンビアの繪箋は壁に貼られて、その上から電球が幾つかの灯の葩を開いてゐた。呼出された人々はや詰めかけてゐた。黒人もゐれば、猶太人もゐた。妻を同伴した英語

を解せぬ人もゐた。

私たちは女事務員から下調べを受けて、公式の宣誓場へ呼入れられるのを待つてゐた。獨身の市民は一も二もなく軍籍に入れられた。妻子のある人でも、財産のある人や、また収入のある妻を持つた人は同じく軍籍に入れられた。また市民になつてゐなかつた外國人でも進んで召集に應ずる宣誓をなしたのもあつた。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

「先づあなたは虚言を言はないといふことを、右の手を舉

げてお誓ひなさい。

私は右の手を擧げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」

「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」  
私の心の中には或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り」と答へ得るであらう。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。併し、その市民權を得ようとすする希望を持つてゐるかと問はれた時に、その希望だに持つてゐないと答へれば、それはつまりこの國に同化することを拒むものであらねばならぬ。太平洋沿岸で

もこの同じ問を發してゐる。それについて我が同胞は何と答へてゐるであらう。私は暫く默然としてコロンビアの繪姿を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國と、この國と一旦戰を開いた暁には、その本國に對して銃を把るといふことを誓はねばならぬ。私はそれが誓へようか。いや、私はこの國の市民となることを本心から望んでゐるだらうか。女神コロンビアの畫像は私が不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐むやうに見えた。

委員は緘黙を守つて私の答を待つてゐた。

「否。」

と私は答へた。

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて、合衆國の敵と戦ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかつた。私はこの國に十三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來た。然るに、今この國が多く犠牲を拂つて戦争をしてゐる秋に當つて、この國の爲に戦ふといふ誓を拒まなければならぬのを悲しんだ。若し一度意を決して合衆國の軍隊に加はつて大西洋を渡るならば、私は自分が生れた國土を愛するといふ、狭いけれど深い愛國心を捨てなければならぬ。私はそれを、善い事と考へ得るけれども、私の肉體はまだ故國の土に

屬し、私の靈魂はなほ祖先のそれに屬したものであることを考へなければならぬ。私は

「否。」

と答へた。

「それでは、あなたは、あなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戦ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私等の敵と見なしてゐるものは、獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本とこの國と砲火の間に見ゆる日が來たとしたら、私等は本國に歸つて、この國と戦ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になるの

希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、しかしこの國との戦には勇んで出るといふ誓を今私は立てねばならぬ。私はこの時、私等はこの國から排斥されてもしかたがないと思つた。そして

「然り。」

と答へた。

斯うして、私はすごく、宣誓場を離れた。下を向いて人の中を通つて歩廊に出た。

(佐々木指月)

## 九 庭

こゝは物音の聞えない片隅、

こゝは日光の静かな庭、

八つ手は其の葉を青々と伸し、

楓は今年も涼しい蔭をつくる。

私に訪れる夏は、

此の小さな蔭に置く籐椅子と、

運ばれる卓の上の紅茶と、

妻と子供と書籍と繪と、

緩やかな日曜の休息と、

貧しいながら落ちつける

安らかな自分の部屋。

こゝは物音の聞えない片隅、  
 しかし私は注意して  
 眼をその片隅にさし向ける。  
 蟻は其の日々の営みに營々と  
 石かげの穴を出て、  
 働き蟻は路に食べ物を奪合ふ。  
 ひきがへるはつは落の葉蔭に蹲り  
 小さな羽蟲を食べる、  
 蝶は鉢の草花に戯れて  
 悦ぶ羽を蜘蛛に捕へられる……。

\*名は誠  
詩人

\*東京府豊多摩郡代  
々幡町大字代々木

こゝは物音も聞えない片隅、  
 しかし絶え間ない戦は  
 こゝの平和の隅にもある。

(川路柳虹)

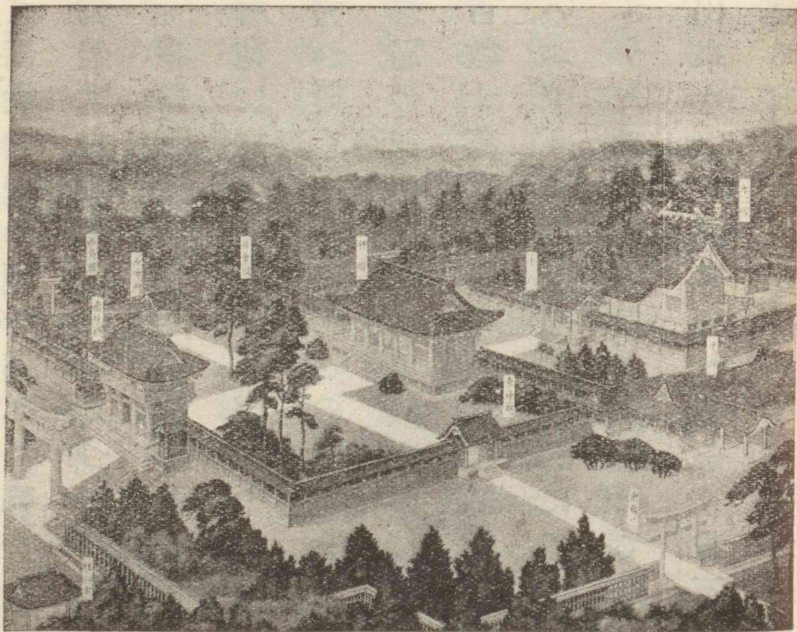
一〇 明治神宮 (一)

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光  
 に包まれてゐる代々木の森を仰ぎ、何處からともなく高く  
 にほつて来る新しい檜の香をかぎながら、私は幾度そこを  
 通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切る鋸  
 の響や、木を削る手斧の音が、快い調子を作つて流れて來た。  
 或時は無数の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈

もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、えい〜聲して曳くのを見た、軍人團や青年團の人々がせつせと働いてゐるのを見たこともあつた。

あのやうにして明治神宮があつたの杜の中に建つのだと思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、國民の心は皆一つだと有り難いやうな懐かしいやうな思で胸が一杯になるのであつた。そして其處を通る毎に、工程が目に見えるやうで、基礎工事が終り、小屋組が出来たのを見ては、殿舎の形の次第に整つて行くのを想像して、たまらない程嬉しく思つた。

たうとう竣工を告げた。かつて露出した赤土の上に、鋭



明治神宮全景

く尖つた切石が幾つもなくもならんでゐた處には、今清々しい小砂利が敷きつめられて、參道の白い線が、常緑の杜の中に長く續いてゐる。以前疎らな松林の中に廣く見渡されてゐた耕地は、いつの間にか見ちがへる程美しい宮苑に化し



て、森嚴幽邃の趣を備へた鬱蒼たる密林の中から、神々しい流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐる。

莊嚴と靜寂と幽雅との神域。私ははじめて明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに斯う感じた。あゝ、何者の力が斯くも見事にこの工事を完成させたのであらう。造營局の記録には、起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が、尺、一萬九千本であるといふやうなことが、數字的に工事の規模を語つてはゐるが、さういふ數字の表から隠れてゐる強い力を忘れることは出來ない。神宮の基礎を千載不動に固め、宮柱を動きなく建て成したものは、こゝに齋かれ給ふ二柱の大神の神徳を

仰ぎ、その大御恵みに對へ奉らんとする國民の至情であるに相違ない。

嗚呼、純粹な動機から造營奉仕をした全國青年團や、百里二百里の遠方から眞心をこめて奉獻して來た國民の至誠がなく、どうして斯う見事に早くこの大工事が完成されよう。實に神苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。全國民誠意の結晶たるこの宮居に、全國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に出て、

遠く神域の中を望み見た刹那に私は此の事を直感した。そして美しい小砂利の上を踏み行く一步々々が、畏多く勿體なくも思はれた。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ出ると、何處からともなく清冽な水の落つる音が聞えて来る。岡山縣萬成産の石で出来てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した細流の風致の面白さ、筑波山の國有林から移して配置された自然石の趣多き上に、數十株の楓が、今しも美しい秋の錦を織つてゐる。此處を除けば、神苑の殆ど總べては人工を排して自然の大觀を呈してゐる。

神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左

\*岡山縣御津郡石井村大字萬成

側並木の斷えた處に、千七百四十の樹齡を重ねたといはれる、直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事である。

此の鳥居の在る處は南參道と、北參道との接合點である。此處を左折すれば、幅員十間の大道が西に向つて百五十間續いてゐる。更に右に折れると、ばつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に高く亭々と聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

\*千駄ヶ谷町大字原宿方面より通ずる幅八間  
\*千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷方面より通ずる幅六間

## 一一 明治神宮(二)

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合せて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に昇ると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、一種の崇高な感じに打たれる。拜殿より奥は、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居るのに、此の神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、

總べてを暴露して見せてゐる。然も、決して淺露な心持はなく、却て一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い、威力が迫り寄るのを覺えるのだ。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だと私は思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近く觸接し、國民と親しく協力して、新國運を打開し新文化を建設しようとして御勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の潤達な御氣象に對して、如何にもふさはしいと感ぜられた。

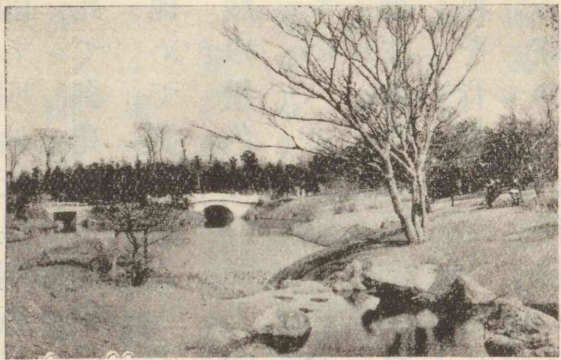
拜殿を中心にして、左右に均齊を保つて長く翼を張つた

廻廊の丸柱の列に沿うて奥を遠く望まれる光景も、たとしへなく莊嚴である。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亘る森林帯があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帯びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目に着く。

寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。



明治神宮寶物殿前の御池

寶物殿は形式を中古時代につけて、其の材料と建築の手法とを現代につけた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、之に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつてわか／＼しい杉の樹が美しく植ゑつらねてある。

私は此の寶物殿まで來ると、再び元來た道を表參道の榊形に近い社務所の邊まで引返した。

このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのままのもので、殊更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帯びてゐる。此の御苑は祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や檜の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりは、すつかりもう深い靄に包まれて、黒々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきり開いたやうに、路線の白い色が暮れ残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴

な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象の消える日があるだらうか。〔明治神宮紀に據る〕

一一 昭憲皇太后十二徳の御歌

節制

はなのはるもみぢのあきのさかづきも

ほどくゝにこそくままほしけれ

清潔

しろたへのころものちりははらへども

うきはこゝろのくもりなりけり

勤勞

みがかずばたまのひかりはいでざらん

人のこゝろもかくこそあるらし



昭憲皇太后

沈黙

すぎたるはおよばざりけりかりそめの

ことばもあだにちらさざらん

確志

ひとごころかゝらましかばしらたまの  
またまは火にもやかれざりけり

誠實

とりどりにつくるかざしの花もあれど  
にほふこころのうるはしきかな

溫和

みだるべきをりをばおきてはなざくら  
まづゑむほどをならひてしがな

謙遜

たかやまのかげをうつしてゆくみづの

ひききにつくをこゝろともがな

順序

おくふかきみちもきはめんものごとの  
もとすゑをだにたがへざりせば

節儉

くれたけのほどよきふしをたがへずば  
すゑばのつゆもみだれざらまし

寧靜

いかさまに身はくだくともむらぎもの  
こゝろはゆたにあるべかりけり

公義

くにたみをすくはんみちもちかきより

おしおよぼさんとほきさかひに

### 一三 小兒の世界

\*英國の神話學者

「子供がつねに悦ぶところのものは、未知の世界への遠征である。と、<sup>\*</sup>アンドルー・ラングは言つた。子供と遊んでゐていつも驚かされるのは、かれ等の觀察が、空想が、私達には全然未知な、想像だに及ばない世界へ常に飛翔してゐることである。

歳晩のことであつた。私は四歳になる女兒をつれて買物に出かけた。くさぐさの買物を濟ませて、電車に乗つてちやうど小川町の交叉點へ來た時、電車は何かの故障で暫時そこに止つてゐた。女兒は其の時窓の玻璃越しに賑かな街頭の景色を眺めてゐた

\*東京市神田區に在る

が、突然叫び出した。

「パパ、お蜜柑、お蜜柑。」

私は子供の眺めてゐた窓外に眼をやつた。

そこは師走のしかももう二三日で年が變らうといふ押し詰つた繁劇と雑沓の巷である。大小の商店は華やかな萬國旗・豆提灯、だんだらの幔幕などで競つて店頭を飾り立て、賑かな樂隊の音楽で景氣を添へてゐる。

めい／＼春の支度らしい大きな買物の包を持つた男女老幼が、人道を、車道を、肩摩らんばかりにして右往左往してゐる。その間を危くも縫つて疾走する電車・自動車・自轉車。わが子は眩しき雑沓の何處に蜜柑を見出したのであらうか。

さう思つて私はしきりに左顧右眄した。けれどもつひに見當



らない。向側に青物店はあるが、それはあまりに遠くして子供の眼に入るべくもない。

「何處に、何處に。」

摸索する父親を嘲けるやうに子供は叫びつづけた。

「パパ、お蜜柑、お蜜柑。」

しばらく彷徨つてゐた私の眼が、ふと地上の或點に向けられたとき、ハタと視線に觸れたものがあつた。なるほど蜜柑だ。たつた一つの小さな蜜柑だ。誰人かのさげた籠からこぼれ落ちたものらしい。ちようど電車の鐵路が交叉した石疊の上にもちよこなんとしてゐた。

「ふむ、あつた。あすこにお蜜柑があるね。」

と言ふと、子供はさも我が意を得たやうに微笑した。

肩摩穀撃の巷、しかも師走の心そぞろなる行人の足下に落ち散つてゐる一顆の蜜柑——誰人にも忘られた、この世界の一劃を靜かに見つめてゐるところに、兒童の不思議な生活がある。さうしてこの一劃の世界こそ、われ／＼成人が已に遠い昔に失つて、つひに奪回し難いものなのである。

これと同じやうな例を私は或秋の日に經驗した。

その日もやはり私は幼い女兒の手を引いて山の手の町を散歩してゐた。さうしてゆくりなく或貴族の宏大な邸宅の前に出た。大きな扉が開かれてゐた。前庭に敷き詰められた玉川砂利の、奥に美々しく巍然とした洋館が見られた。

私はこの堂々たる大厦が幼兒の頭にどんな印象を與へるかを

知りたいたと思つた。そこで指さしながら、

「又子、これはなあに。」

と訊いてみた。

ところが意外にも幼児はこんな答をしたのである。

「花。」

と、ただ一言。

私はこの返答に喫驚した。尠くとも「お家」とか「お寺」ぐらゐの答を豫期してゐた私は――

そこで今更のやうに私はその邸の全廓を見直した。さうしてハタと真相を知つた。

最前に言つた前庭の奥に聳えた洋館――その入口近くに、うす紅の芙蓉の花が午前の陽をうけてやさしく咲いてゐた。

\* 詩人  
童謡詩人

私は愛兒の頭を撫しながら、ソロモンの榮華ならぬ高閣の誇の、この小さき神の前に於ては、つひに一莖の花の美に如かざるをしみじみ感じたのである。  
(西條八十)

### 一四 子供とその父

子供、お父さん僕は學校へ行くのがいやなのですよ、だつて皆が僕の事を先生の花だといつていぢめるのです。僕が一番なのも僕が出来るから一番なのでなくて、僕が先生のお氣に入りだから、先生におべつかつかつてお氣に入るやうにするから、一番になるのだと言ふのですよ。花といふのはヒイキといふ事なのよ。ヒイキといふ字が集まつて花といふ字になるのでせう。ですから私は或時先生にさう言つたの、皆が私の出来るのは、本當に出来るの

ではなくつて、先生のヒイキで、本當の實力からいふと、僕は五六番以上にはなれない人間で、唯おべつかを遣ふことがうまいので、僕が一番になつてゐるのだつて。先生、それは本當ですか。本當なら僕を五六番に下げて下さい。僕は勉強して自分が本當に出来る人間だといふことを示しますからつて。すると、先生は笑ひながら、「そんな事は氣にしないがい」。出来る生徒は皆出来ない生徒からさう思はれるのだ。併し男がそんな事で参つては駄目だ。言ひたい事は言はして置くがい。世の中に出ると、もつと意地の悪い人がある。私達はそれを恐れては駄目だ。そんな意氣地がない人間は幾ら出来ても、偉い人間になれない。何と言はれても自分の方さへ正しければ、それでいゝのだ。皆にそれがわかつてもらへないでも、それは氣にしないがい。孔子といふ支那で

一番偉い人は、人に色々の事をいはれるのを氣にしてゐる人に、自分を省みて、疚しい處がなければ、何も心配する事はない。それを心配するのは男でないと仰しやつた。お前もさういふ覺悟でなければいけない。と仰しやつた。僕はそれを聞いて、元氣になつて、皆に何を言はれたつて平氣だ。自分はそんな事を恐れるやうな男ではない。さう思つてゐるの。處が意地の悪い生徒がゐて、それに又おべつかつかつて色々の事をいふ人もくつついて、僕を見ると、「花が來た、先生の花が來た、臭い汚い花が來た。」と言ふ。そして昨日晝休に歸つて來ると、机の上に花の畫がかいてあるの。そしてこんな事を聞えよがしに言ふの。「出來ないで出来るものな  
あに。」  
「花。」

僕は腹が立つたの、僕は口惜しかつたの、ただ、怒るわけにもゆ

かなかつたの。聞えないふりをして、孔子の言つた言葉ばかりを考へてゐたの。自分の駄目になることを皆望んでゐるのね。だけど、僕は駄目にはならないの。それが口惜しいの。殊に二番にある人が力強いので、皆その人におべつかつかつてゐるの。だから意地悪をされるので、僕の側に來られないの。意地悪に負けるやうな人は、僕は嫌ひだから、僕もさういふ人とはつきあひたくなないので。学校に行くのが段々いやになつて、これでは困ると思つてゐるの。学校は幾らでもあるのですから、他の學校に移つたらどうかと思ふの。他へ行けば、こんなに酷い目には逢はないでもすむと思ふの。

父 お前のさう思ふのは無理だとは思はない。併し、何處かへ行けばいゝ處があるかも知れないといふ心掛はよくない。それよ

り今にお前の本當の友達がお前の級から出る事を信じて勉強して行くがよいのだ。もう少しで、きつとお前には本當にたよりになる友達が出て來るに違ひない、お前さへ間違ひなく立派にやつて行くなら、同じ孔子の言葉に徳のある人は獨りぼつちになることはない、必ず友達があるといつてある。お前も自分の學問が出來るといふ事を自慢にしないで、お前の自慢にしてゐない事は私も知つてゐるが、そして間違ひのない道を履んで、僻んだり、恨んだりせず、人に信用し、いゝ人が必ずあるといふ事を信じて、少しでもいゝ處を有つてゐる人には厚意を有つやうにして行くときつといゝ友達が出來、そしてお前が本當に立派な人間で、先生に媚びたり、諂つたりしない、學問の本當に出來る人だといふ事が皆にわかり出すに違ひない。それは二三の人は何時まで經つても、お

前の悪口をいひ、お前を誤解させようと骨折り、その爲にはどんな事でもするかも知れない。だが先生も仰しやる通り、そんな事は氣にしないで、黙つてゐても、お前を知つて愛してゐる人が、何處かにゐて、その人がお前の公明正大な人間だといふ事を腹の底から知つてくれる事を信じて、何といはれても平氣でもつと立派な人間にならうと骨折るのが一番偉いのだ。尤も無理しては駄目だ。早く偉く思はれたく思つたり、早く自分が正直な人間のやうに思はれたく思つては駄目だ。それは耐へるだけ耐へて、耐へきれないまで耐へてゐる内に、少しづつ芽が出て來るのだ。お父さんだつて、随分悪口言はれた事も、中傷された事もある。山師だと言はれたり、偽善者だと言はれたり、賣名漢だと言はれたり、新聞でたゝかれたり、心ある人にさへ背かれ、疑はれ、親友にまで無氣味な疑を

抱かれかゝつた事もある。希望を失ひかけ、人間に愛相をつかし、何をしてもし始まらないと思ひ、五月蠅い事がいやになつて、淋しく家に一人で閉籠つてゐたい時もあった。併しさういふ時でも、お父さんは、これはいけない、これは墮落だ、自分の徳の足りない事を忘れて他人をたよりにする罪だ。他人に何とか思はれたり、言はれたりして、自分の値はそれで上り下りするものではない。自分の値は唯他人に悪口言はれて淋しくなる時に下り、他人に何とか思はれても自分さへ正しくしてゐればいゝと思ふ時に上るものだ。といふ事を本當に知つてゐたから、それに打勝つてこゝまで來た。これからも何度もそんな目に逢ふだらう。だが、怖いのは自分をその爲に賤しくする事だ。そんな目に逢つても自分を益、貴くする事が出來たら、それは此の上なく名譽な事だ。お前は苦しいだ

らう、又淋しいだらう。だが、私の子として私よりもつと立派な人間になつてくれる氣なら、そんな事には驚かないでくれ。そして立派な人間になつてくれ。正しいと思ふ事をする時は、出来るだけ大膽で、不正な事をする時は、出来るだけ臆病であつてくれ。そしてどんな時でも自棄を起さずに、恥づべき事を恥ぢる代りに、恥ぢてはならない事を恥ぢずに、立派に生きてくれ。心を僻ましてはいけない。お前の友達はきつとお前の學校にある、お前の級にある。幾らお前の價值を低く皆に思はせようとするものがある。つても、心配する事はない。眞價は一寸の隙間からも洩れて他人の心に觸れる、覆ひつくされる心配はない。子供 お父さん僕はもう誰に何と言はれても恐れませんが、先生とお父さんは僕を知つて下さいますから。

父 お前を本當に知つてゐるものは、私でも先生でもない。それが見えない處にゐる或者だ。それはお前の心の内にゐて、恥づべき事と、恥ぢてはならない事を教へるものだ。そして恥づべき事はなるべくしないやうにし、恥ぢてはならない事をするのに勇ましく恐れない事だ。さあ學校へ行つておいで。花といはれる事は恥ではない。媚びたり、諂つたりする事は恥だが媚びたり、諂つたりしないのに、するやうに思はれるのを恐れるのも恥だ。他人の蔭口をきいたり、意地悪をするのは恥だ、中傷するのはなほ恥だ。だが、蔭口をきかれたり、意地悪をされたり、中傷されたり、誤解されたりすることは恥ではない。それを恐れるのは男として恥だ。それに耐へ、それに動かされないのは實に男の誇だ。行け、我が子よ。男として恥づかしくない男になつてくれ。友達は必ず出來

る。出来ないでも恐れなものには、必ず友達は出来るものだ、その人相當の友は出来るものだ。それは鏡に自分の姿が映るやうに間違ひのない事だ。

子供 お父さん、それでは行つて來ます。

父 行つておいで。 (我が子の後姿の見えなくなるまで見送つて涙ぐみながら) お前の一生も樂ではあるまい。だが立派に生きてくれ。神よ、私を守つて下さるやうに、子供を守つて下さい。どうぞ、子供を幸福にしてやつて、勇氣を失はないやうにして下さい。よき友をお與へ下さい。私の過を赦して下さいさるやうに、子供の過を赦して下さい。そして私以上にお役に立てて下さい。だが、幸福にして下さい、もしお赦し下さるならば。

文士

(武者小路實篤)

### 一五 融合ふ心

子どもと共に遊ぶ――それは決して馬鹿げたことなどではない。むしろそれは此の上なく尊い心の現れである。私達はみづから省みてさうした尊い心のあまりに缺けてゐることを恥ぢないで居られぬのである。

つい先頃も何かの話のついでに、或忙職に就いてゐる人がいかにもしみじみとこんなことを言つてゐたのを聞いた。

「私達のやうに仕事にあくせくしてゐる者は、どうも家族と本當に溶け合ふ時間がなくて困ります。せめて自分の

子どもたちとだけでも本當に融合つて楽しむ時間をもつとほしいと思ひますが、とかくそれが得られないのです。時々さうした氣持が心の底から湧き起るやうなことがあるつても、つい私達は「物」を與へることによつて胡魔化して過ぎようとする場合が多いのです。兩親に對しても、妻に對しても、子どもたちに對しても、或はその他の親しい人々に對しても、とかく私達は何等かの「物」を與へることによつて相手を喜ばせて、それで本當の愛の要求を胡魔化して過さうとする淺ましい心があつて困ります。

本當の愛は「物」を與へられた歡びや、「物」を與へて喜ばれることから得る得意感などであつてはならないと思ひます。

なぜ私たちは自分の子どもたちとだけでも本當に融合ひ、本當に楽しむやうな心を、せめて時々でも持つことが出来ないものでせう。「物」によつて愛を代表させようとしては、かへつて「物」によつて本當の心と心との融合を妨げられてゐるのでせう。

此の話を聞いて、私ははつとしたのであつた。さうした淺ましい心を、私も餘りに多くの場合持ち過ぎてゐるからだ。いや私ばかりでない、世の中の人の大概はそれだ。良寛和尚が到るところで子どもたちの最も親しい友人となり得たのは、決して彼が子どもたちに與へた「物」のおかげではなかつたに違ひない。しかし、私達は自分の子ども



\*名は正治  
文士

に對してすら、何かしら「物」を與へることによつて彼等の歡心を買はうとする場合が多いのだ。子どもたちが私に求めて居るもの——眞に求めてゐるものは、決して「物」ではない筈だ。しかも、私達は彼等の本當に求めて居るものを「物」によつて胡魔化さうとしてゐる場合があまりに多いのだ。これは單に子どもに對してのみではない。あらゆる人に對してさうだ。人間同士がお互に求め合つてゐる心は、決して乞食の心ではない。しかるに、なぜ私達はお互に乞食に對するやうな心もちで相對せねばならぬか。\*相馬御風

### 一六 他人の長所・短所

他人の長所を認めて、これを尊重し、勸り、助成することは、雜り氣のない朗かな歡びである。併し不幸にして我等が眼を開いて他に對するとき、我等の瞳にその影を落すものは他人の長所や美點ばかりではない。その弱點や短所も亦否應なしにその黑影を印象する場合がある。その時この餘儀ない印象を如何に取扱ふべきか。この問題が自分にとつては一苦勞である。

その缺點が甚だしく重大な致命的なものでない限り、これをむきになつて憤慨したり、これを自分に加へられたる傷害として不愉快がつたりする心持からは、自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へて、それを玩具にして、調か

戯つたりくすぐつたりする悪戯氣も、近頃は随分少くなつて來た。自分は相手の弱點を自分一人の腹に吞込んで、黙つて之を看過してしまふか、若しくは好意ある微笑を以て相手がその弱點を仕末して行く自然の経過を見護つてゐるか、することが出来るやうに思ふ。さうして、必要に應じて適度の忠告と暗示とを與へて行くことが出来るやうに思ふ。相手の長所を重んじて、これを助成して行くことに中心の態度を置く限り、多少の弱點を寛容することは、そんなに困難なことではない。

併し自分は友人に、彼は俺の弱點を吞込んで知らぬ顔をしてゐるといふ印象を與へることを恐れる。自分は無意

識の間に、自分が相手の弱點を脅す態度をとつてゐることを恐れる。その人に十分の信頼を寄せてゐる場合でない限り、他人から吞込まれてゐると思ふことは、決して心持のよいことではない。自分は他人から十分信頼される資格を自分に許すことが出来ないから、自分が相手の弱點を看過して黙つてゐることが、却つて相手に不安の念を與へることを恐れるのである。若しN先生のやうに、相手の弱點に對する不同意を即座に即刻に發表して、而も少しも相互の親愛を傷つけずに行くことが出来たら、自分はどんなにせいせいすることであらう。併し現在のところ自分にはそれが出来ない。自分は相手の弱點を感じながら、或時が

來るまではこれを自分の腹の中に藏つて置く。さうして或特別に静かな時を擇んで、出来るだけ和かな言葉を以て相手に忠告する。現在の自分には、これ以上のことは徳が足りなくて企及ばないのである。凡そ言へないことがあると云ふことは、人と人との間に在つて決して喜ばしいことではない。然るに自分には時として相手に言へない心持がある。若しこの沈黙が善良な意志から出てゐることを信じ得なかつたら、自分は嘸氣詰りな人に見えることであらう。唯自分の善良な意志を信ずることが出来る人のみ、自分の友達となり得るのである。

さうして更に悪いことは、自分の軽々に看過したつもり

でゐる缺點が、その實自分の心の底に引掛つて、相手に對する輕蔑若しくは怒を構成してゐる場合があることである。自分は時として、意識的にその人の長所を見ながら、若しくは見ようと努めながら、無意識の間にその人を輕蔑してゐることを發見する。この矛盾を發見することは自分にとつて特に苦しい。

\* (阿部次郎)

## 一七 手品師

手品といふものは、餘り澤山見るとくだらなくなるが、一つ二つ見るのは面白いものだ。昔備前少將光政が、旅藝人の手品師が岡山の城下に來たのを召し出して、手品を見た

\* 文學士  
哲學者  
東北帝國大學教授

事があつた。一體大名や華族などいふものは、家老とか家扶とかの手で、始終上手な手品を見せつけられてゐるものなのだが、備前少將は案外眼の明るい大名だつたので、用人達もこの人の前では、

「二二が六」



熊澤蕃山肖像

と手品の算盤珠を弾いて見せる譯にはいかなかつた。で、少將は一度手品といふものが見たくて堪らなかつたのだ。手品師は恐るゝ御前へ出た。夏蜜柑のやうな痘痕面をした少將の後には、婦人のやうな熊澤蕃山や、淺田左

源太などが畏まつてゐたが、手品師の眼には顔の見さかひなどは少しも附かなかつた。大勢の顔が風呂敷包のやうに一塊になつて動いた。

手品師は小手調べに二つ三つ器用な手品を見せた。それから金魚釣といつて、居合せた小姓の懐中から、金魚を釣り出さうといふ自慢の藝に取りかかつた。

小姓は氣味悪がつて、小さな襟を搔き合せたりした。手品師はさつと釣針を投げて、勢よく小姓の襟先を掠めて、夫を引き上げたが、釣針の先には何もかかつて居なかつた。手品師は慌てて、二度三度と同じ事を繰り返したが、その都度手先が段々そゝつかしくなるばかりで、金魚は少しも釣

れなかつた。そして終には、金魚の代りに小姓の前髪を釣り上げた。小姓は鮒の泳ぐやうな手つきをした。夫を見て、一座は聲を揚げて笑つた。

手品師は眞赤になつて疊の上に這ひ踞ばつた。額からは膩汗がだらりと流れた。

「これまで一度だつて仕損つた事のない手品なのでござりますが、今日はまた散々の不首尾でお詫の申上げやうもござりません。」手品師は子供の掌面でべそを搔く蟬のやうな聲をした。

「私めの考へますには、此の御座敷には並勝れた偉い御器量のお方が居らせられますので、夫でどうも手品が段取

よく運ばないかのやうに存じられまする。」

備前少將はそれを聞くと、にやりと軽く笑つた。後の方では蕃山と左源太が腹のなかで頷いたらしかつた。

手品師め、手品には失敗つたが、巧い事を言つたもので、少將と蕃山と左源太とは、各自腹のなかでは、その偉い器量人は多分乃公だなと思つたらしかつた。この人達にだつて自惚は相當にあつたものだ。金魚は釣れなかつたが、手品師は素晴らしい物を三つ釣り上げてゐる。  
(薄田泣菫)

\*名は淳介  
大阪毎日新聞記者  
詩人

一八 南國の町と島(一)

長崎

長崎の町は伊太利の港に似てゐると言つた人があつた。恐らくさうであらう。

山と山との懷にいだかれた南國の港町。

山には城のやうな石垣を積み上げたお寺が多く、それがみんな甍を敷いた道で聯ねられてゐる。

暗い大樟の蔭には古びた山門がある。支那のお寺もあれば、舊教のお寺もある。

長崎は古いお寺の町である。

ローマの七つの丘を想はせるやうな丘から丘へ、甍の道が寺の門を連ねて、軒の低い古風な窓からは、人懐かしさうに色の白い女たちが、南國的な黒い瞳をかがやかせて、街の

旅人を見てゐる。



長崎市の景

夏から秋にかけて、近在の田舎から草花を賣りに來る女たちは、ローマの郊外からローマにはいつて來るといふ花賣少女たちを聯想させる。

花賣り女たちの後からは、大きな牛がのそくとやつて來る。牛には肩から首にかけて數十の鈴がつけてあ

る。

牛が歩きたんびに、鈴の音ががらんと涼しい朝風をつたうて聞えて来る。

首から小さな十字架を吊したクロと呼ばれる顔色のわるい舊教徒たちも見える。

浦上の奥には何十年か前から、舊教徒達の寄進の煉瓦で築き上げられてゐた教會堂が、丘の上に建つてゐた。

一年に五寸か一尺ぐらゐづつ積み上げられて行くので、まだ出来上らないうちに、下の方には蔦がまとひついてゐたが、このごろでは恐らく丘の上に高く聳えてゐることであらう。鐘も響いてゐることであらう。

## 一九 南國の町と島(二)

### 壹 岐

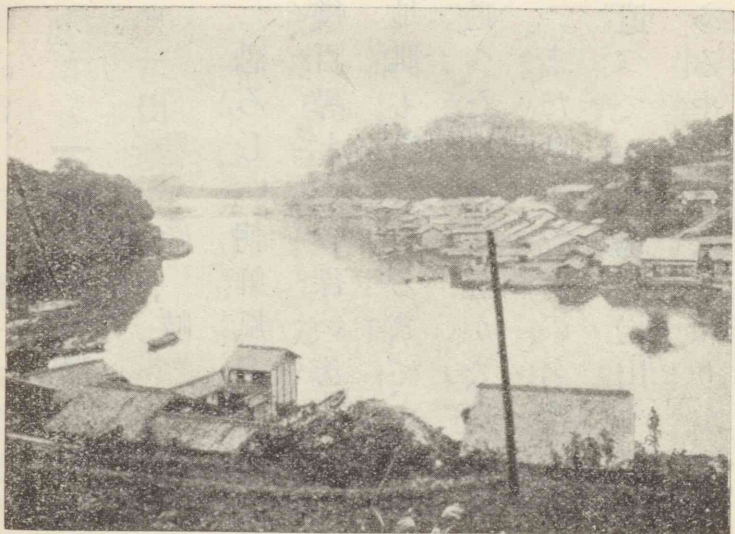
恐ろしい朝鮮風が夜晝の分ちなく二三月の間荒んで、幾百尋といふ深い海の上に、轟々とそゞり立つた島の山の地肌も疎になるまで、木の葉を吹き落してしまふと、やがて、甦つたやうな静かな島の春が還つて来るのである。

まだ冬の荒海の名残が、北の方へ突き出た岬のあたりに遺つてゐて、黝い岩山を目がけて、後から後からと、三四丈もあるやうな大うねりが、頭を擡げて打つ突かつてゐる、その小山のやうな浪のなかをくぐつて飛ぶ鷗の群の寂しい聲

を聽いてゐる間に、既に北から南へ三十五里の間を流れた

山の背には、柔かな春の光が、一つ一つの草の葉を恵むやうに漲つてゐる。

山蘭や風蘭の花が、殆ど年に一度も人間の足跡をとどめぬ高い山の上に薫つてゐたり、名も知れぬやうな一本一本の樹が、どれもこれも自分等の個性を示すやうに、同じ緑といつ



壺 岐 郷 之 浦

てもみんながそれぞれに異なる嫩葉の色を輝かして來るのである。冬の風が荒くて、延びきれないので、山が高くなるにつれて、幹は途中から切つたやうになつて、づんぐりむつくりと言つた風な形をしてゐる。

馬酔木に似て、もつと脊のひよる長い木から、南京玉でもつらねたやうな、或は銀糸でも垂らしたやうな可憐な花が、山といふ山谿といふ谿を埋めて咲く。木犀に似て、木犀よりももつと薄くて、柔かな葉の間からは、黄色な花がこぼれるやうに到るところの山に咲いてゐる。幾曲りにも彎曲した紺青の淵にのぞんで、垂直に突つ立つてゐる岩の上には、山櫻の花が陽に輝きながら色を競つてゐる。



この頃である、太陽に向いた山と、太陽に背いた山の匂や  
空氣の感じが、はつきりと區別されるのは。

波の音が轟々とまるで遠い嵐のやうに、ひつきりなしに  
聞えてゐる間にでも、私たちはちよつと立ち停まつて暗い  
谿の方に耳を傾ければ、何の悲しみも、寂しみも知らないや  
うな鶯の聲を幾つも聴くことができる。

博多からこの島に來る船の上に、鶯商人を見るのもこの  
ごろのことである。

春は何處の世界でも早く經ち易い。山の櫻が散つたと  
思ふ頃は、島を埋めて海岸の山には薄紅の躑躅が咲く。山  
の背には菖蒲の花が咲く。山の背からは、東の方は北九州

の山脈や平戸島が水天髣髴の間に見える。西の方には一  
層近く朝鮮の山が煙つて見える。

雲雀の唄を浴びながら、三尺にも足らぬやうな島の小馬  
に跨つた五人、十人といふ女たちの群が、高原の草を踏みに  
じつて行くのもこの頃である。

島の人たちの生活は、このころから活動期に入るのであ  
る。濱の石屋根の上には網が干され、濱には一杯に高い杭  
を樹てて、それに幾段にも綱が張られる。それに毎日幾十  
萬といふ鳥賊が干されるのである。

鳥賊の干し場が準備せられるころになると、色々な渡り  
鳥が集まつて來る。燕と殆ど同じころに黒鳥や時鳥など

\*名は源次郎  
早稻田大學講師

の群が海をわたつて来る。時鳥は晝日中でも三羽五羽と群をつくつて、漁村の空を鳴きながら飛んで行く。(吉田絃二郎)

## 二〇 民族競争と科學一)

此の頃は世界の平和といふことが盛んに唱へられてゐる。世界大戦の惨害を目のあたりに見た者が、戦争の絶無を期し得られる平和の世界を希望し、これに憧憬するのは決して無理な事ではない。併し今日までの歴史に鑑み、又現在の状態から考へると絶対的平和の時代が人類生活に來ようとは思はれない。「生活は戦争なり」と昔の人のいつた通り、異なる民族の多數が對立して、各自の發展に努める

と、その間に利害の衝突を來す事は免れ難いから、何等かの形に於ける戦争は到底避けられないことである。

甲の膨脹が乙の存在を危地に陥れるとか、丙の發展が丁の進路を塞ぐとかいふ事情が起つて、談判に談判を重ねても容易に纏まらぬ場合には、戦争の外に適當な解決の方法はない。それで一方には熱心に平和を希望し、力を盡くして戦争を避ける手段を講じながらも、亦同時に軍備を充實して萬一の場合に備ふる。假令戦争には至らないでも、他民族の無理な要求を拒絶するには、相當の軍備のあることが必要である。

今の世の中で、戦争を始めるには非常な決心を要する故、

大抵な事では砲火を交へるには至らぬが、その間にも民族の競争は決して休んでは居ない。平和の時代には、また所謂「平和の戦争」が盛んであつて、これに敗れた民族は實に悲惨な状態に陥らねばならぬ。平和の戦争は即ち世界の市場を相手とする殖産工業の競争であつて、この競争に於ては優良品を製造してこれを廉く賣出す者が勝利を占めるのは當然である。交通の開けなかつた昔は、各民族は自分の入用な物を自分で造つて、他とは關係なしに生活するところが出来たが、文明が進み、運輸が便利になつて、世界の隅々までが隣同士のやうになつた今日に於ては、鎖國は到底不可能である。他民族と貿易する以上は、否でも應でも、平和

の戦争に加はらねばならぬ。かくして戦争の有無に拘らず、民族間に競争の絶えることはないが、この競争に勝つか負けるかは、主として科學の進歩如何によつて定まるのである。

最近の世界大戦の如きは、既に殆ど科學の戦争とも言ふべきであつたが、今後の戦争では更に科學の應用が盛んになつて、その勝敗は科學の應用の優劣によつて定まることであらうと思はれる。終局の勝敗は種々複雑な理由によりて決するのは無論で、一概には論斷せられぬが、他の事情が大體同様である場合には、一歩でも科學の進歩して居る方が勝つべきことは疑がない。飛行機でも、潜航艇でも、毒

瓦斯でも、爆弾でも、敵に優つたものがあれば、無論それだけ勝てる見込が多い。しかも、優良な武器を造ることは決して一朝一夕に出来る譯ではなく、常常から十分に研究を積み重ねばならず、そのためには基礎となるべき科學の進歩が何よりも必要である。科學研究に遅れた民族は、何時でも他の新発見や新發明を僅かに眞似するに過ぎぬから、何時までも相手より先に進むことが出来ず、永久に彼等の後に跟隨して行くの外はないが、斯くては一朝事あるに臨んで頗る心細い次第である。

假に最新式の武器を外國から輸入したとしても、是が破損した場合には、是と同等或は同等以上の物を製造し得る

だけの腕前がなければ、完全な修復は出来ない。また最新の科學知識を應用した機械は、當然精巧を極めたものである故、之を操縦するには、それに準じた高い程度の科學的素養を要する。若しも此の點に缺けた者が操縦するならば、飛行機ならば墜落し、潜航艇ならば沈没するであらう。されば、今後の萬一の場合を思へば、専門科學者の研究が最も大切であると共に、一般世人の科學的素養の標準を高めることが急務である。

## 二一 民族競争と科學(二)

武器を用ゐる戦争は如何に激しくても一時的であるが、

所謂「平和の戦争」は長く續いて、而も休む時がない。野蠻時代には交通の便が開けなかつた爲、各民族は自國で出來た衣服を着て満足してゐたが、文明が進み、國際間の關係が密接になるに隨つて、嗜好も次第に變り、新たな要求も生じて、他國の産物を輸入せずには一日も暮らせぬやうになる。例へば茶の出來ぬ國で茶が日常缺くべからざる飲物となり、羊の飼へぬ國で誰も彼もが毛織物を着るやうになるものである。輸入を要するものは必ずしも斯様な簡単な物ばかりではない。文明が進めば人間の生活が複雑になつて、日々に入用な品物も多くは精巧な細工を施した人造品である。電話機・自動車・タイプライター・ミシンといふやうな

機械が入用となるが、此等の機械を製造し得ぬ民族は、悉く是を他から輸入せねばならぬ。入用品に限らず、娯樂のためにもピアノ・蓄音機・活動寫眞などを要する。

此の如く、文明人の生活には機械は附物であり、必需品であるから、誰も之を使はずに濟ます譯に行かぬ。文明の進むにつれ、その需要は益殖える。而も精巧な機械を造るには考案者のみならず、實際に之を製造する職工までが、科學的頭腦を備へなければならぬ。若しも職工の頭が低級であれば、形だけは巧妙に眞似ても、用ゐて見ると全く役に立たぬやうな、似て非なる物を造るであらう。されば世間一般の科學的素養の低い國では、天産物を其の儘で廉く輸出

して、加工品を外國から高く輸入せねばならず、それでは、經濟が成立たない。特に面積狭く天産物に乏しい國では、斯様な状態が長く續いては、須臾にして破産するの外はない。輸出と輸入との平均を保たしめるには、是非とも他國に劣らぬ立派な品物を製造して、世界の市場に持出さねばならぬが、それには、一人一人の職工までが相當に優れた科學的頭腦を持つまでに一般の水準を高める必要がある。

科學の進んだ民族は、製造の方法を巧に工夫して優良品を安く賣出し得る。是に反し、科學の幼稚な民族は、腕が足らぬ上に製造に無駄な手間が多くかゝるので、劣悪な品を高く賣らねばならぬこととなる。かゝる品が同時に市場

にその何れが競争に勝つべきかは論ずるまでもない。

以上、吾人は單に物質方面に於ける科學の必要に就いて、僅かにその一端を述べたに過ぎぬ。科學の効用は決してこの方面に限る譯ではない。科學的に考へ得る頭腦を有することは、思想方面にも頗る有効であつて、他の民族に負けぬためには、この方面を大いに奨勵せねばならぬ。武器其の他の製造工業の方に直接應用されるのは、主として物理學と化學とであるから、是のみが必要なものの如くに考へる人もあるが、如何に巧妙に出來た人造品でも、無論天然物に加工したものに他ならぬ故、材料を研究するには動物・植物・礦物の學問を等閑視してはならぬ。併し此等は思想

の方面には餘り直接な影響は及ぼさぬ。思想發達の上に大關係を有するのは生物學である。

今日の社會制度は昔からの繼續で、随分不合理と考へられる部分もあり、強ひて保存しようとするや、却つて社會の混亂破滅を來す心配がないとも限らぬから、時期を見計らつて徐に改めて行くがよい。生物學上の知識が國民一般に行渡つて、思想の根柢を造るやうになれば、頑冥な舊思想を何處までも守ることは不可能となり、不合理な制度も一つづつ改良されるに至るであらう。

右に述べた通り、民族發展のためには科學の進歩普及が何よりも大切であるが、この事は如何なる民族にも同じ程

度に行はれ得べきやといふと、無造作に「然り」とは答へられない。猿は如何に骨折りて教へても猿だけの藝より出來ぬが如く、各民族にはそれぞれ科學能力の程度に差違があつて、盛んに科學を進歩させて行く民族もあれば、幾ら獎勵しても或程度以上には到底受容れ得ないものもあらう。自己の民族の將來を思へば、科學は何處までも獎勵してその進歩を圖らねばならず、また研究すれば研究しただけの効果は必ず擧るに相違ないが、民族としての天分以上のことは到底望めまい。

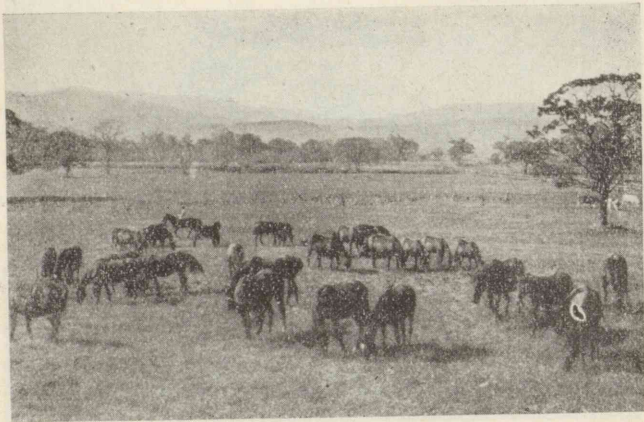
ともあれ、人の世に競争の存續する限り、その競争場裡に立つ吾吾は、人事を盡くして天命を待つの外はないので、吾

\*理學博士  
動物學者  
東京高等師範學校  
教授

吾は我が民族の能力の限りに努力せねばならぬことを痛感するのである。  
(丘淺次郎の文に據る)

## 二二 牧場の曉

じやんくくと半鐘の音が霜夜に冴えて、如何にもけたたましく聞える。僕はがはと起きた。外面はまだ暗い。昨夜湯に入つて打寛いで、したゝか夕飯を食べた迄は覺えてゐるが、それから後は一瀉千里、唯一息に寢てしまつて、今始めて目が覺めた。此の鐘で愈、牧夫、耕夫が勢揃をして牧場の仕事を始めるのである。「行つて見ようではないか」と、側に寢てゐた友の畫伯を促せば、寒さと睡たさに辟易して、



(一) 場 牧 の 道 海 北

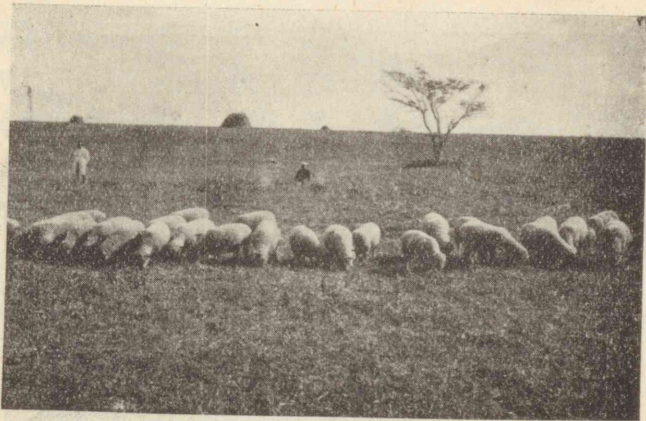
「畫は想像でも畫けるから、君だけ行つて來たまへ」として起きようともしない。僕は艶然として手早く着物を更めて出た。眞暗な廊下を手探りで事務所の方へ出ると、此處の板間の中央に切つた圍爐裏を取圍んで、大きな男が二十人ほど立ち、はだかつてゐる。赫々と起つた炭火の光に映る所を見ると、何れも脚絆草鞋かひがひしく、穿きこんで、頭はすつぽりと頭巾で包んでゐる。腰には鳶



口だの鎌だの、やかましさをぼつこんで、いかにも

物々しい。

外の軒下には同じ風體をした女がやはり二十人ばかり寒風に吹曝されて立つてゐる。折しもあれ、憂々たる馬蹄の響が遠くより傳はりて、間もなく二頭づつ繋いだ馬を片手に取りながら走らせ來る人が大分ある。中には、悠悠と鞍壺に乗つて佐野源左衛門尉常世唯今着到といふ見えのもある。霜白き曉の空、鏗々



能鉢木中の人物

(二) 場 牧 の 道 海 北

たる鐘の音に連れて入馬の馳せ參ずる様戰場もかくやと



(三) 場 牧 の 道 海 北

勇ましげな牧場を、生優しい風流らしいものと心得て來た僕は少からず面喰つた。やがて一同集つたと見えて、頭領らしいのがそれぞれ仕事と持場の割當を言渡す。言渡された者はそれぞれ部署に就いて、八方へちりぢりになつた。仕事は六時に始つて、夕の四時

らせると、銘々其の持場々々で其のまゝ休む。子持の女などは、此の時を待ちかねて子供を連れて來させて、畑の眞中で乳を飲ませる。鐘の鳴ると同時に、母は子の方へ、子は負はれたまゝ母の方へ互に駆けよる様、如何にもいぢらしい。持場といふのは色々ある。林を造る、木を樵る、垣を結ぶ、小屋を建てる、畑を耕す、草を刈る、馬を追ふ、牛を飼ふ。牛の病む時は病舎に牽いて行つて看とる。牡牛の出來過ぎた時は不便ながら殺す。秣はライ玉蜀黍の類を刻んで、新鮮保藏として秣坑に貯へる。冬のまなか池の氷が厚く張り詰めると、それを切つて氷屋に貯へる。數へ立てれば仕事は數限りもない。牧場の内に生を送るものだけが、三百人に

餘るといふ。

六時少し過ぎて夜は追々に明けはなれた。雪袴穿いて頼被した子供が三人五人連立つて出て來る。女の子もまじる。中には犬の子を連れてふざけちらして行くものもある。何處へ行くのかと聞けば、つい近くの學校へといふ。學校は九時に始まるのだが、父母共に仕事に出た後一人家に居てもつまらぬといふので、今から散々道草を食ひながら、三時間ほどかかつて行くのだといふ。大陸式の原野だけに子供までが大陸式に出來てゐる。

（杉村楚人冠）

## 二三 思出の記(一)

\*名は廣太郎  
東京朝日新聞記者

如何ならむ野の末なりとも、都のわづらはしきよりはと  
思ひたちて、過ぎし秋の暮より吾居を湘南の涯に定めぬ。



櫻牛の像

訪ひくる人もさすがに  
稀なれば、世を外なる住  
ひわびしくもまた長閑  
なり。

相模灘にかけたる眺めいとひろやかなり。東は平塚茅が  
崎の汀をつたうて江の島・鎌倉の浦々より、三浦半島の斷續  
を髣髴の間に認むべく、晴れわたりたる空には安房館山あ

たりの山遙にその間にながめらる。西は小磯・小田原のあ  
なた、足柄山・函根より伊豆の連山をたどりて遠く稻取の岬  
まで、色おもしろう薄れゆくさま、山のすがたまたあるまじ  
くうるはし。南は遠洋の煙波をうけて、大島山青螺の如く  
横たはり、ゆくへも知らず立つ煙の色さまざまのたゞずま  
ひ心ゆくばかりなり。心を傷ましむるかな、見渡すかぎり  
のながめは、一としてわが會遊の地ならざるはなし。今は  
病ある身の心にまかせぬ事多きこそうたてけれ。夕べの  
空にながめ入りて、こしかた遠く思ひ起せば、今のわが身に  
ひきくらべて悲しきことのいひしらず湧き出づるに、いつ  
しか涙の流るるを覺えず。あゝいかにうるはしく天に輝

けばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にありて幾時ぞや、げに見はてぬ夢の惜しみてもかひなきはわが十年の過去なり。

今のわれはおもはぬ地にさすらひの人となりて、いたづらに會遊の山河を望める身ぞ。秋くれて冬來り、小笹が末に露たばしる、あはれ飄零のわが身にも似たるかな。萬山黄ばみ落ちて里に悲風あり。かゝる時にこそ思ある身の哀れは知らるゝなれ。

憶へばはや八年の昔となりけるよ、足柄山の奥にゆきくられて豊原のなにかしが風騒のあとをたづねしは。春まささに暮れなむとして、竹の下道そことしも見えわかず、十日あ

まりの月影に會我野の原もおぼろにして、やうやく國府津の里にたどりつきしは、あはれにもまた興深き旅なりき。その折つれだちし友はわが幼少よりの知己にて、この世ながく離れじとこそは願ひしが、今や身世處を異にして天涯相見るに由なし。わがみじかき命の中にまた相見む折の幾度かあるべき。おもへばはかなき人の遭逢かな。山河の姿とこしへにかはらざるは、はかなき人に物思へとや。足柄の嶺、函根の山より伊豆の浦つたひに、わが思ひいよいはるかなり。眞鶴が崎の盡くるあたりは、如何になつかしき土地なるよ。春ごとにわれは老いて六歳は旦暮の如くたちぬれども、熱海にくらしし三月のみこそいかばか

\*  
獨逸の抒情詩人

\*  
姉崎正治  
文學博士  
宗教學者  
東京帝國大學教授

\*  
獨逸の詩人  
希臘の女詩人

り長く覺えしか。かの時のわれは今の如く身にも心にも  
わづらひあるわれなりき。一卷のハイン集を旦暮の友と  
して、うきことしげきこの世をば泣きくらさむと、あはれに  
も思ひさだめてき。今にして思へば、かかる咏歎の中にわ  
がいひしらぬ幸ありたりしなり。わが孤獨を慰めむとて、  
わが友嘲風都よりたづね來りき。あゝいかなる歡びを以  
て、われはわが友を擁きしぞや。雨のあした、月の夕べ語り  
もし語られもせしこの世のうさのかずくにわれやいく  
その涙をそそぎたりけむ。友はまことに情ある人なれば、  
心よわきわれに咏歎のたのしみを禁めざりき。ある日、魚  
見が崎の斷崖に上り、共にグリルバルツエルがサツフオー

\*  
サツフオー

の悲曲を誦みてたのみがたき世の事、人の上の、古も今もか  
はりなきを想ひ人生の悲哀とこしへに盡きざるをかこち、  
あはれかゝる斷崖の上より、希臘の女詩人はその最後の救  
ひを求めけむよと談り合ひし時、われは崖下千尺の杳冥に  
見惚れて、慄然として目さめたるが如きをおぼえたりき。  
かくてわれは友に語りき、サツフオーの死や遅かりしと。  
あゝこの日いかに樂しかりしよ。わが薄倖の生涯にもな  
ほかゝる福祉はありけるよ。思ひ出すだにわが胸の物狂  
ほしうとどろくこそ怪しけれ。

二四 思出の記 (二)

うるはしき日は夢の如く消え去りて我が思ひのみぞ獨り老いにける。嘲風今は西の方歐洲に去りて際遭われと同じからず、ただ曾遊の興會さすが忘じがたくてや、この春のはじめの文に、今宵は君を熱海におとづれし日ぞなど書き送りけるこそ懐かしけれ。今世に二人なき友の天涯はるかにわかれ住みて、互に孤獨の生を送らむは、まことに悲しからずや。

見渡せば、沖の小島と詠まれけむ、初島わたり漕ぐ船の行方は網代伊東の方なるべし。南天城の高嶺峨々として、豆南の天を限るところ、またこれわが曾遊の跡ならずや。二歳前の冬の最中、われ函根を踰えて、三島修善寺より伊豆の

山深く分入りて下田の港に迫り、白濱稻取の浦をつたうて半島の東岸を繞りたりき。名だたる險難の土地とて、もとより車馬の便りに乏しく、三十餘里の惡路を物ともせず歩みしは、げにわれながら健氣なりき。さるにても人の身の頼み難きことよ、二歳後の今のわれはいかなる態ぞ。旦夕の保生に心を勞して、遣悶の酒また多く用ふべからず、浪浪として懶怠の月日を送る、おろかにもまた憐れならずや。あゝわれ何時の日かまた登攀の壯遊を試み得べき。

江の島鎌倉の山水は、いふまでもなくわが舊年の知己なり。わけて田越の里にあかしくらしし幾春秋こそ心ゆくばかり偲ばるれ。田越川のほとりに六代御前の古墳あり。

われここに佇回して哀れなる平家の末路をおもひうかべしことそも幾度なりけむ。このうたかたの生涯にわれ多く望むところ無し。ただ數ならぬ身のなほ願ひ得べくんば、わが末路の願はくは平家の如くうるはしかれ。われはかゝる思ひにかきくれて、星空に七百年のむかしをたどりたりき。三浦半島のつくるるところ、地低うして海に沈み房南の山香としてその上に浮かぶ。あゝかしこにもまたわが思ひはかゝれるよ。われ大學に入りし歳の春なりき。友と共に東總房の海涯に沿うて、九十九里の長灣より、小湊・勝浦・天津の浦々をたどりて、白濱根木の岬をめぐりしは、世にも楽しき遊なりき。爾來春秋いくたびか去來して、われ

またいくたびか北條館山のほとりにさすらひき。或は那古灣頭の夕照をあびて、友と自然の色彩を論ひ、あるは根本の海樓に倚りてローレライを歌ひしは、光景宛として尙眼にあれども、早く既に八歳の昔とはなりけるよ。時は逝水の如くしばらくも停らず、人は春のごとく老いて、青春や暮れむとす。心を傷ましむるかな。

あゝ湘南の風光うるはしからざるに非ず、ただ懷往の情日に切なるを如何にすべき。世にも人にも離れたる身にしあれば、頼もしからぬ行末かけて、われはた何の望むところぞ。ただ言ふまじく憶ふまじき過去の今なほ夢に入ることそうれしけれ。

(高山樗牛)

\*名は林次郎  
文學博士  
評論家  
明治三十五年歿

二五 卵

一

あをい瀬戸引きの鍋のなかに  
 おほきな卵が三つ煮えています。  
 或冬の明るい日、  
 ひらいた鍋のおもてに  
 もやくと湯氣がみえて  
 絶えず湧き絶えず消えてゆきます。  
 頻りなる湯氣のうごき、

しめきつたしづかな部屋に

何といふ敏感な

そしてはかない湯氣でせう。

ひそやかな私のこゝろが

それに對ひて

いひ知らぬ意味を

もとめようとしてゐます。

私の直觀に

いま沈黙のうづきが感ぜられます。

二

黒く塗つた金火箸で



そつと卵をまろばせてみると、  
ぐるぐるところがつて  
菱なりにならんだり、  
またずつと離れたりします。  
湯のなかでかちりかちりと  
三つの卵が觸れあふ低音  
私はじつとそれを見まもりました。  
離れたり觸れあつたり、  
それがおのづからな  
あらはれなのかも知れません。

さうして卵の黄味が  
おそらくは偏らずに、  
まんなかへ落ちつくことができでせう。  
かちりかちりと觸れあふ低音  
殻のいろが白いのや、  
あかみをたくさん帯びたのや、  
私たち人間のやうに  
こゝにもいろぐな姿があります。  
濡れとほるたまごの殻に、うつりぬる、  
障子のかげの歪めるをみる。

\*  
理學博士  
物理學者  
詩人

湯に浮ける卵に見いり、しみじみと  
わがかなしみに觸れゆきにけり。

(石原純)

## 二六 沼地

或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の悪い片隅に、それも恐ろしく貧弱な縁へはいつて、忘れられたやうに懸かつてゐたのである。畫は確か「沼地」とか云ふので、畫家は知名の人でも何でもなかつた。又

畫そのものも、唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

その上不思議な事にこの畫家は、翳鬱たる草木を描きながら、一刷毛も緑の色を使つてゐない。蘆や白楊オシラや無花果を彩るものは、どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黄色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意とこんな誇張を加へたのであらうか。私はこの畫の前に立つて、それから受ける感じを味はふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのであ

る。しかしその畫の中に恐ろしい力が潜んでゐる事は、見てゐる中にわかつて來た。殊に前景の土の如きは、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせる程、それ程的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隠れるやうな、滑な淤泥の心もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を掴まうとしてゐる、傷ましい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける様に、この黄いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざまの畫の中で、この一枚に拮抗し得る程力強い畫は、どこにも見出す事が出来なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

かう云ふ言葉と共に肩を叩かれた私は、恰も何か心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓着にかう言ひながら、剃刀を當てたばかりの顯で、沼地の畫をさし示した。流行の茶の背廣を着た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、——新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承不承に返事をした。

「傑作です。」

「傑作——ですか。これは面白い。」

記者は腹を揺つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう、近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆言ひ合せたやうにこちらを見た。私は愈不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないので。すが、何しろ當人が口癖のやうにこゝへ出すと言つてゐたものですから、遺族が審査員へ頼んで、やつとこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族、ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」  
「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでした。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐ

た。

「どうして。」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」

「この畫を描いた時ですか。」

「勿論です。氣違ひでもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと言つて感心しておいでなさる。そこが大いに面白いです。」

記者は又得意さうに聲を擧げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つ

畫布  
Canvas\*

とも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆ど嚴肅にも近い感情が私の全精神に言ひやうのない波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐ろしい焦燥と不安とに虐まれてゐる、傷ましい藝術家の姿を見出した。「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」

記者は晴々した顔をして、嬉しさうに微笑した。これが、無名の藝術家が——我我の一人が、その生命を犠牲にして、纔に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は

全身に異様な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い室と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、<sup>ゴチラフ</sup>無花果が、自然それ自身に見るやうな凄じい勢で生きてゐる。……………

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然としてかう繰返した。  
(芥川龍之介)

## 二七 板倉勝重

天正十六年、<sup>一</sup>德川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至つて、多くの御家人の中を擇び給ひ、<sup>二</sup>勝重もて此の處の町奉行

文士  
\*  
作家

德川家康  
\*  
一

今の静岡市  
\*  
二

德川譜代の臣  
\*  
三  
河の人 京都所司  
代として長吏のほ  
まれがあつた

に任せらる。

初め勝重を召され、此の職のこと仰せ下されしが、其の職に堪へざる由を固く辭し申しけれども、さらに御許しなし。勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ、御返事をば申すべけれ」と申す。徳川殿笑はせたまひて、「さもありなん。罷り歸りて相謀れ」と仰せくださる。妻は、勝重がかかへるをむかへて、「悦ぶべきことありと告知らする人あり。如何なる幸か候」と言ひけるに、勝重ものをも言はずほくそゑみて、衣裳ぬぎすて座になほり、妻にうち向ひ、されば、今日召されしこと、餘の儀にあらず。此の度、御座所を移さるるに依つて、かの町の奉行たるべき由を仰せ下さる。如

何にもかなふべからざる旨を辭し申せども、御許しなし。

『さらば、わが家にかへり、妻に謀り候はん』と申してまかり歸りぬ。さて、御事は如何にか思ふといふ。

妻は大いに驚きて、あな淺まし。私事などならば、『夫婦議』といふ事もこそあれ。公にてかゝる事や宣ふべき。ましてこれは仰せ下さるゝ所なり。殊に其の職に堪へん堪へじは、御心にこそあるべけれ、みづからいかで知り候べき。といへば、勝重、いや、われ此の職に堪へん堪へじは、わが心一つのみにあらず、御身の心に因る事にて侍るぞ。まづ心を静めてよく聞かれよ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行・頭人などと言はるゝ者の其の身を失ひ、其の家を

亡ぼさぬは稀なり。或は内縁に就いて訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因つて、理を判つこと私多し。これらの災は婦人より起る所なり。われ若し此の職承らん後は、親しき人の言ひよらん事なりとも、訴訟のこと執り給ふまじきか、苞苴のものを受け給ふまじきか。これらの事を始として、おことは、勝重の身の上如何なる不思議の事ありとも、さし出でて物宣ふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずる事は、如何にも叶ふべからず。さればこそ『御身と謀るべし。』と申したれ。といふ。

妻つくづくうち聞きて、『誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ。みづからは如何なる誓をも立てなん。疾く参りて

受けさせたまへ。』といふ。勝重大いに悦びて、神にかけ佛にかけて、かたき誓立てさせて、この上は思ひ置くことなし。さらばまゐらん。』とて、衣裳ひきつくろうて出づるに、袴の後腰をもぢりて着たり。妻うしろさまに見て、『袴の後あしう候。』といひて、立寄りてなほさんとす。勝重聞きもあへず、『さればこそ』わが妻に謀らん。』と申ししは過たざりけれ。勝重が身の上のこと、如何なる不思議ありとも、さし出でて物いはじと誓ひしは、今のほどぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重、職承ることかなふべからず。』とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、深くわびければ、『さらば其の言葉、いつまでも忘れ給ふな。』といひて、御前

\*新井白石の著  
石名は君美 徳川  
幕府の儒官 享保  
十年歿

に參る。徳川殿、如何に、汝が妻は何とか言ひし」と仰せければ、「妻にて候ものが、慎みて承れと申し侍り」と申す。「さこそはあらめ」とて、大いに笑はせ給ひきとなり。  
(藩翰譜)

## 二八 汽車

私のところの男の子は、數へ年のまだ三歳であるが、この子が汽車を崇拜することは全く絶對的と言つていゝ。汽車は父よりも母よりも偉いと思つてゐるのだから、實に驚くべきである。

まだ、私が母に抱かれてゐた頃、母の里への往き還りに、私は始めて人力車の上から、汽車といふものを見た。その時

の驚きと喜びとは、その後の何に對するよりも甚大なものであつた。山手の母の里へ行くには、五里の平原の道を人力車で半日は揺られなければならなかつたが、その中ほどに鐵道の踏切があつて、白と赤とのシグナルがカタリツと上つたり下つたりしてゐた次の宿場の出はづれに差しかかる嬉しさは、今だに忘れられない。其處で人力車を乗り換へるのであつたが、彼是してゐるうちに、いつもの汽車が堂々とやつて來ることがあつた。その汽車を見る喜びの爲に、私は母の里へ往くことをいつも一年中の楽しみにしてゐた。

汽車の乗客としての光榮に始めて浴したのは、私の十五



の時であつたが、その時の嬉しさといふものはなかつた。私は顔が眞赤になり、激しく動悸し、自分の占むべき座席さへ見出し得なかつた。それからやゝ動悸がをさまると、何か自分が一かどの大人にでもなつたかのやうな矜りを感じて、讀めもせぬスコットの「湖上\*の美人」などを繙いたものだ。どうせ讀めないの、それも柵に載せると、今度は愈初めから眺めたかつた外の景色を凝視めにかゝつた。硝子扉を上げ下げすることにさへ、おづおづと遠慮したりはにかんだりしたものだ。

筑紫の大平野を汽車は疾走するのであつた。近い森と遠い山とが、その大きな圓盤の上を颯颯として旋轉するの

\* Sir Walter Scott  
英國十八世紀の  
小説家  
The Lady of the  
Lake  
叙事長詩

であつた。見る物のことごとくが驚異の對象でないものはなく、その清新さ、爽快さは、私を有頂天に喜ばせずにはおかなかつた。

うちの子は、その初めは汽車と電車との區別すらつかかなかつたやうだつたが、二三度上京してゐる中に、すっかり汽車の車輪の音の調子まですつかり耳にとめてしまつた。無論汽鐘車や貨物列車の見わけ位はとうの以前に知つてしまつてゐた。で、露臺の上から斜丘の下をゆく汽車の音や藪越しに息してゆく白い湯煙を見るなり、それこそ氣ちがひのやうに騒ぎ立てるのである。

「テイチャバへ行かう。テイチャバへ行かう。」

日に三四度は泣き喚くので、仕方なしに時たまは下のガードまで女中がおぶつて出る。歸りには反りくりかへつてどりにも手におへないので、どうかすると驛まで行つて、日が暮れてから電車で歸つて來ることがある。山の上の生活はその子の父母にはいかにも閑寂であるが、生長力の旺盛なこの幼児にはとても堪へられない何物かがあるにちがひない。

大人たちからの土産も、この子には汽車が最も喜ばれる。赤や青やの大小數かぎりもない汽車が、かうして喜ばれると片端からまたぶち壊されてゆく。繪本も汽車や電車や自動車のついた物に限られてゐる。鼠の娘が紅い襟をし

て餅を搗いてゐるのや、目鼻のある紅い太陽がにこ〜笑つてゐる畫などは、乗り物の畫ほどには喜ばれないから考へさせられるのである。

汽車で無くとも、植物や動物の圖鑑などは夢中で眺め入つてゐるのを見ると、兒童がどれだけ大自然の實相を識ることの喜びを持ち、之に對するすぐれた直覺力を有するかがわかる。架空の構想や傳奇的童話に、所謂詩的な心を遊ばせるまでに、そこにはあまりに餘裕の無い眞實の觀照といふものが、彼等を常に正しく生かききらうとしてゐるのがわかる。彼等は日常の嬉戯にも、終始自然の實相に直面してゐるのである。世の大人たちは、この重大を少しも

考へないで、いゝ加減のその場かぎりの胡麻化しを教へようとする。

詩は實相の中にこそあるのである。

(北原白秋)

## 二九 鍛 鍊

ジョン・スチュアート・ミルは生れて甫<sup>ま</sup>めて二歳の時から、早くも父の手許で學問を始め、三歳の頃からはギリシヤ語を學び、八歳の時には更に外國語としてラテン語を學び、十三歳に達する頃にはすでに經濟學をも一通りは學んでしまつて、ほゞ今日の大學を卒業したくらゐの學問をした人である。

かくいへば、ミルは非常な天才であつたかの如く思はれるが、決してさうではない。父ジェームス、ミルが思ひ切つて鍛鍊をした結果である。父のミルは、あの有名な英領印度史を脱稿する前には、毎朝四時に起き、夜は十二時に寝たと傳へられてゐる、この努力主義をばそのまゝ、自分の子に應用したのである。かゝる父の下に教育せられた子供のミルは、生れてから殆ど玩具といふものを持たされたこともなく、子供の遊戯もせず、繪本なども父からは曾てあてがつてもらつたことがない。日曜日でも遊び癖がつくとよくないといふので、一日でも遊ばせられなかつたといふことである。ミルはかくの如き教育を受けた上に、獨立して

からも非常な勉強をした人である。彼の平生の格言は、人の働けなくなる夜がもう来るぞ」といふのであつたと傳へられてゐるが、げに彼はいつ死ぬかも知れぬ、生きてゐるけふの中に働いて置かねばならぬといふ考を、始終持つてゐたものと思はれる。彼は三十三歳で肺病に罹り、四十八歳の時には終に一方の肺を失つてしまつたほどであつたけれども、六十七歳で永眠するまで、殆ど一日の休もなく働いた。そして永眠前死の床に在つて「余は人事を盡くしたり」との一句を我々に遺し得たのであつた。

考へると、同じ鐵でも、鍛錬すれば刀となり、更に十分に鍛錬すれば、遂に古今の名刀となる。相州物の刃の部分はい

はゆる双金と皮金を合はせて、無慮八百四十萬七千四十枚ほどの鋼鐵を折重ねて鍛錬したものだといふ。同じ鋼鐵でも、八百四十萬枚も折重ねるほどの鍛錬をすると、人を斬ること春風を斬るが如しといふ古今の名刀が出来上るのである。繰返していふが、同じ鋼鐵である、ただ鍛へに鍛へて、之を折重ねること、八百四十萬枚にして、始めて古今の名刀となる。人間も同様である。同じ人間ながら、苦心努力、折重ねること八百四十萬枚に達すれば、いかなる人もそれぞれの方に於て必ず有數な人物となり、世に交つて折れもせず、曲りもしない豪傑になり得るのである。相州傳の鍛刀法、これを人間に譬へれば即ち教育である。火に入れ、

水に入れ、延ばしては重ね、重ねては延ばし、遂には八百何十萬枚も折重ねるほど、打つて打つて打鍛へなければ、立派な人間は出来ない。

古人も「これ聖、念なければ狂と作り、これ狂、よく念へば聖と作る」といひ、又「人一たびすれば己、これを百たびし、人十たびすれば己、これを千たびす」ともいつてゐるが、實に偉人が天下に名を成したのは、すべて非常な苦心と努力を費し、驚くべき勉強と修養を積んだ爲である。約言すれば、いづれも非常な鍛錬を経た結果である。

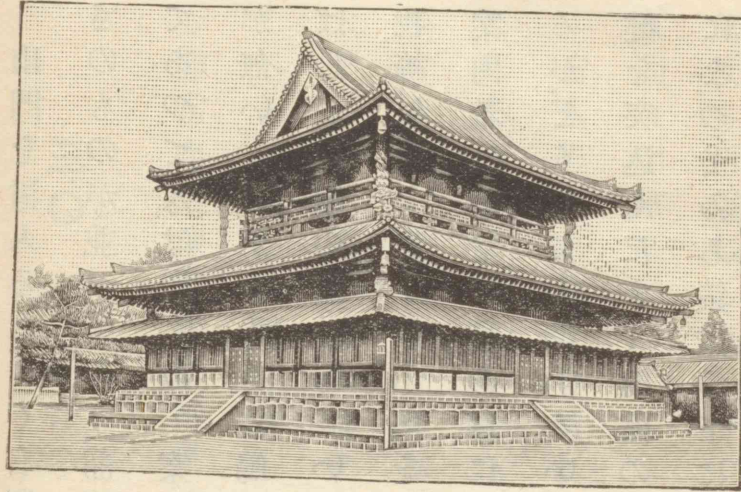
\* (河上肇)

\* 經濟學者  
法學博士  
京都帝國大學教授

### 三〇 法隆寺の鐘

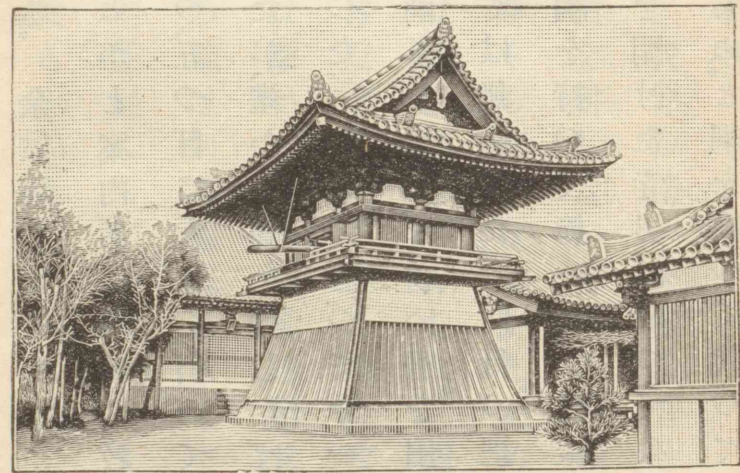
山門を這入ると、すぐ右側に寫眞や寶物の説明や、くさぐさのものが並べてあり、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん」と呼んだが返事が無い。鐘がゴーンと鳴る。案内者はだまつて猿臂を延ばして、戸棚の横から長い鍵を出して我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見返りつゝ、其の後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んで「コツ」とこねくが、どうしても開かない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突込んだまゝ、鐘樓の方に行く。見ると二階建のやうになつてゐる鐘樓の下に、袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つて居る。

我等も案内者のあとについて行く。男が綱をゆるめると



法隆寺金堂

鐘がゴーンと鳴る。「八さん、開けておくれ、わたしが其の間撞いてるさかい」と案内者は代つて綱を持つた。寺男は黙つて綱を渡して、金堂の方に走つて行つた。案内者は一二三四と口のうちに撞木の揺れる數を數へて、五つ目に綱をゆるめる。さうすると撞木が鐘に當る。ゴ



法隆寺鐘樓

線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當ると、ゴーン、ゴウ

ンと鳴る。嘗て佛蘭西から日本の美術を調べに来て居た人が、特に此の寺の鐘を賞めてゐた事を思ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて鐘は露出して居ない。薄暗い處に、細長い形をした餘り大きくない鐘の、青錆が品よく古色を呈して附いて居るのが、窓から射し入る光

ゴウゴウと靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。余は堪らなくなつて、どうか僕にも一度撞かしてくれぬかと案内者に頼んで、教はるまゝに一二三と數をくりつ、五つ目に大きく引いて綱を離した。撞木が當るは當つたが、纔かに音を發したばかりで涼しい清い梵音は出なかつた。残念に思つて今一度と數をくつて又綱をゆるめた。前よりは、やゝ善い音を出したが、それでも心耳を澄ます音では無かつた。同行の把栗が、僕にも一つ撞かしてくれ」と綱を持つて撞いた。同様に力無い響であつた。漸く金堂を開けた寺男は歸つて來て、そんな撞き様をしてはどもならぬ」と綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力

のある音に復つた。

我等の撞いた鐘の音を法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら其の力の無い音に耳を欬て、佛力の俄に斯くも衰へたるかと、定めて驚いた事であつたらう、併し其は唯三撞きであつた。四撞き目は再び元の音に戻つて、天日は舊の如く明らかになつた。嗚呼、此の靈鐘を瀆した罪は深い。併し、法隆寺始まつて以來、佛法の混ぶる迄、此の寺の鐘は何萬遍鳴ることであらう、何億遍鳴ることであらう。何億遍でも可い、其のうちの二遍だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次ぎの世に、此の罪深い余が萬々一にも佛の國に生れるやうな事があるならば、其は慥に此

の二撞きの鐘の音による事と信ずる。

此の村は砧も法の響かな。

(高濱虚子)

\*名は詩  
俳人

### 三一 瀬戸内海

春めいた長閑な日だつた。前の石垣の間から大きな蜃  
蛎が、長い冬籠の大儀さうな身體を半分出して、じつと日光  
を浴びてゐる、さういふ午前だつた。私もいくらか軽い心  
持で前の障子を一ぱいにあけ、朝晝一緒の食事をしてゐた。  
向島の山の上には、青くうつすりと四國の山々が眺められ  
た。私はふと旅を思ひ立つた。そして旅行案内を出し、讃  
岐行の船の時間などを調べた。

\*尾道市の向うに  
ある島

翌日は薄日のさした寒いやな日だつた。空模様も本  
當でなく、風もあつた。私はちよつと迷つたが、やはり出か  
けることにして、一時半頃汽船の出る處へ行つた。着くの  
が三十分遅れた爲に、それだけ二時發から遅れて船は出發  
した。

さき程まで薄日のさしてゐた空は、いつかどんよりと曇  
つて、寒い風が西から吹いて居た。私は船室へはいらうか  
と思つたが、何かしらそれも惜しい氣持から、二重廻しの羽  
根をかき合せ、立てた襟に顔を埋めて、なほ甲板のベンチに  
腰を据ゑてゐた。

船は島と島との間を縫つて進んだ。島々の傾斜地に作



られた麥畑が、一畑ごとに濃い緑、淡い緑とはつきりくぎりをつけて、曇つた空の下にピロイドのやうに滑かに美しく眺められた。それから島々の峯の線が、いかにも力強く美しく眺められた。曇日を背にした方が、殊に輪廓がくつきりとよく見えた。私は市の瓢箪屋で見た割瓢の割目の線を想ひ出した。自然の作る線、これにはやはり共通な力強さ美しさがあることに感服した。

或島は遠く、或島はすぐ側を通つた。少し人家のある濱邊には、出鼻の潮風に吹き曲げられた一二本の老松の下に、きつと「常明燈」と深く刻りつけられた古風な石の燈臺が見られた。

帆を張つた漁船が四五艘、黒ずんだ藍色の海を力強く走つてゐた。事務長はこの邊が内海の真中で、西からも東からも汐が上げて来て、こゝで又別れて兩方へ退いて行くのだと説明した。

「來月は善通寺さんの御開扉で、又一段と賑はふことござんせう。こんなこともいつた。」

私は一人船尾へ行つて、そのこのベンチに腰かけた。私は象頭山、それからそれに連なる山々を眺めた。私はさき程事務長が「あれがその象の頭に似てゐるといふので、それで象頭山金比羅大權現と申すさうにござんす」といつたのを思ひ出した。そして私は、それだけの頭を出して大地へ埋

つてゐる大きな象が、全身で立上つた場合を空想したりした。それから起る人間の騷、人間がその爲に滅し盡くされるか、人間がそれを斃すかといふ騷、世界中の軍人、政治家、學者が智慧をしぼる。大砲、地雷、さういふものは、象皮病といふ位で、その象では皮膚の厚みが一町くらゐある爲に用をなさない。食糧攻にするには、朝飯と晝飯の間が五十年なのでどうすることも出来ない。賢い人間は、怒らせなければ悪い事はしないだらうといふ。印度の或宗旨の人々は神だといふ。しかし全體の人間はどうかして殺さうとさまざまな詭計を弄する。たうとう象は怒り出す。……私はいつか自分がその象になつて、人間との戦争になつて、一人

で興奮してゐた。

都會で一つ足踏をすると、一時に五萬人がつぶされる。

大砲、地雷、毒瓦斯、飛行機、飛行船、さういふあらゆる人智を盡くした武器で攻寄せられる。しかし私が鼻で一つ吹けば、飛行機は蚊よりも脆く落ち、ツェッペリンは風船玉のやうに飛んで行つてしまふ。私が鼻へ吸ひこんだ水を吐けば、洪水になり、海に一度はいつて駈上つて來ると、それが大きな津波になる。……

「御退屈でござりました。もうあれが多度津でござります。十分で着きますで御支度を……」。

かう事務長が知らせに來た。私は退屈どころではなかつ

\*小説家

たのである。ぼろ／＼と耳の底へいやに響く汽笛を頻りに鳴らしながら、船は屋根の澤山見える多度津へ向つて進んでゐた。私はたわいない想像から覺めた。別に支度もなかつたので、洋傘を取りに一度船室へ降りて、又出て來た。夕日が沖の島といふ島の上に赤く輝き出した。甲板には十四五人の客が立つてゐた。多度津の波止場には波がぶつけてゐた。波止場の中には達磨船・千石船といふやうな荷物船が澤山はいつて居た。

(志賀直哉)

### 三二 大きな戸

(幼時の追懐)

そんなに廣いさうして薄暗い土間を今まで見たことはなかつた。天井は高いところにあつて眞黒であつた。そこに大きな戸があつた。それほど大きな戸も今まで見たことはない。私はその戸をあけて外へ出たいと思つた。外には牛小屋がある。私は大きな戸の棧に手をかけていろいろに骨を折つて見た。が、その戸は少しも動かない、それほど重い。人人は私に氣がついて、そのうちの一人は急いで土間へ下りて來て、私の爲に大きな戸を開けてくれた、  
 いかにも輕々と、ただ一寸片手をかけただけで、それが

私には不思議であつた、自分にはどうしても出来ないことを、その人は——大人は易々としてのける。私は私の體が出られる程に開けてくれたその戸を、自分でもつと開けて見ようとした。私がさうするのを見て、私の爲にそれを開けてくれた人は、それだけ開いたのでは未だ私が満足しなかつたと思つたのであらう、もう一度手をかけてその戸をもつと開けてくれようとした。けれども、私は慌てて何も言はずに、その人がさうすることを拒んだ。それから、それ以上はひとりて開けて見ようとする骨折りを自分でやつて見た。大きな戸の厚さは、私の手のひらには一杯であつた。私は兩方の手と體とで、力一ぱいに戸を引いて見た。

戸は少し動いた。もう一遍力を込めると、戸ももう一遍少し動いた。そんなことを何度かして見た上で、私は今度はそれを閉めて見ようとした。一旦閉めてしまつて、それからそれを自分の手で自分の體の出られるだけ開けて見よう、開けて見られさうだからといふのが私の考であつた。私は力を籠めて閉めようと力めた。戸はどうしても少しも閉まる方向へは動かなかつた。そこで私は、未だ私の傍に立つて私のすることを見て居た人に頼んで、その戸を閉めてもらつた。直にその人はその戸をびつしやりと閉めた。私は自分の頼み方がいけなかつたと思つて、言葉だけではよく言へないので、手で説明してそんなにびつしやり

閉切るのではない、少しは開けて置いてくれとその人を見上げながら言つた。その人は私の頼んだ通りに、頼んだほど戸を隙かせてくれた。それは私の手が戸にかけられる程であつた。私は再びそこに両手をかけて、その重い戸をぢりぢりと動かしした。丁度蟻が一疋で重い蜻蛉を運ぶやうに骨を折つて、それを少しづつ幾度もつづけた。さうしてやつと自分の體が外に脱け出られるほど、自分の手で開けることが出来るやうになつた。

「ほう。えらい、えらい。」

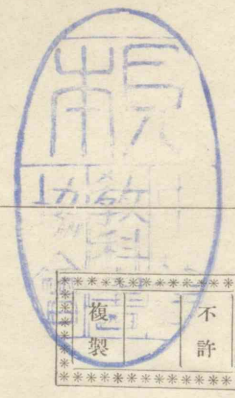
私はさう言つて褒められた。またこれは褒められるだけの値打があると思つた。

私は、その重い戸をその日一日で開けられるやうになつたのだから、最初の日にはどうしても自分の力では駄目であつたのが、その家に幾日かゝるうちに、毎日毎日の稽古でそれだけの力が出たのであつたのだから、その點はいまは臚げである。どちらのやうにも思へる。何れにしても、その大きな戸を自分で開けることは餘程の骨折りでもあり、面白いことでもあつた。その家の人達は、それを面白いことに思つたと見えて、私とその戸から出入する度に、私の両手が掛るほどづつ戸を隙かせてくれて、その上は私自身に開けさせた。

\*作家

(佐藤春夫)

# 女子新讀本 卷四 終



大正十五年七月十五日發行  
 大正十五年十月十二日訂正再版發行  
 大正十五年七月十五日發行  
 大正十五年十月十二日訂正再版發行

## 女子新讀本

定價 卷一、二、三、四 各金四拾貳錢  
 卷五、六、七、八 各金拾八錢  
 卷九、十 各金拾七錢

## 昭和三年度臨時

定價 卷一、二、三、四 各金七拾錢  
 卷五、六、七、八 各金六拾錢  
 卷九、十 各金六拾貳錢

著者	久松 潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤 正 叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁

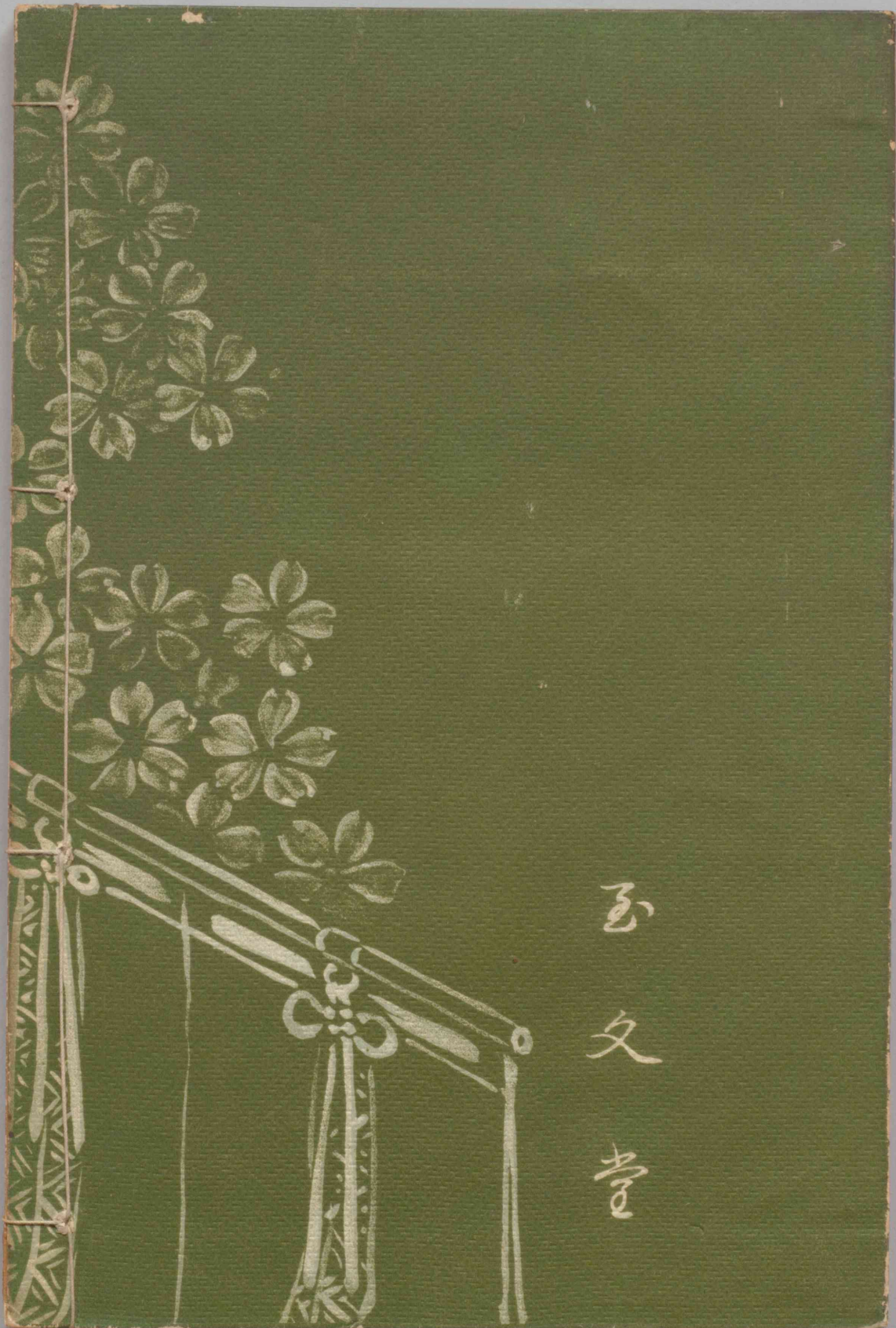
(三編印刷株式會社印刷)

## 發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
振替口座東京二九五〇七番

至 文 堂  
電話青山 三四五六番  
四三四三番

弊堂發行 of 教科書は供給差支無き様常に澤山製本出来準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます



玉文堂